

研究紀要

第5集

目次

SpellingのErrorsとその記憶法	中西幸二…(1)
高校生における学友関係の実証的研究	横山一郎…(15)
「今昔物語集」と「俊頼髓脳」との関係(一)	橘 健二…(1)

1962

奈良女子大学文学部

附属中学校・高等学校

と二音に分けて発音する。教授者が[vi]と正しく発音すると恐らく大方の生徒はBと区別できぬのではなかろうか。これは教授者が生徒の便宜をはかり、追従し習慣化してしまった結果の悪循環で、これを断ち切らぬといつまでも生徒の耳を訓練することにならない。要するに音韻的あやまりについては教授者はつねに正しい発音を与え、生徒にそれへの関心、注意をいれさせることが唯一の方法であろうが、この中にも又問題がある。即ち正しい発音を知っていることが必ずしも正しい spelling とむすびつかず、かえってそのために誤りをおかす case もある。例えば分類項の(5)などがその例である。全体の誤りの中で5を占めていることからわかるように生徒における発音通りに spell しようとする傾向は元来大へんつよいものがある。教授者は正しい発音と spelling との関係をどんなふうに指導すべきであろうか。両者は切りはなすべき問題でないと同時に、又別個のものでもあるのだから発音だけを重視せず各単語について発音とつづりとの関係をその都度生徒に示すべきであろうか。又その場合生徒の学力のどんな段階、どんな時期に行うのが適当か、等々種々の問題が起ってくる。

Bテストについて

前述の通りこのテストは音を知って spell する際の定則についての知識を調べるもので、英語の語彙に存在しない、意味のない音声を生徒に口頭で与え英語らしいつづりに直させるものである。Bテストに用いた4つの音韻群は次の通りである。

1. [əstréŋgə], 2. [ə:réinveil], 3. [fa:θ], 4. [ti:bəs]

以上の4つをテープを用いず各々の学年を異なったテスターが担当した。

1. [ə]について、高1では語頭の[ə]に関しては、erとarの二通りに限られたが高3ではこの二つの他にurとorが加えられている。[str]について、高1ではstr-が32%もあったのに対し高3では7%で、他の大部分がstr-であった。
2. [ə:]について、高1高2ではer, arに集中された。高3は1.の場合同様、ar, er, ur, ear, arr, など多岐にわたった。[veil]について、高2は何かの理由でvaleに集中した。[V]を[b]に取りちがえたものが高1高3に多かった、下学年に特に多いのはbeilというspellであった。(25%)高3ではvail, vale, beil, bale, bailなど二重母音によませる場合は語尾のeを忘れていない。
3. [a:]について、同上の傾向がみられる。高1ではarが87%で集中されている。高3はar, ir, er, ur, al, air, a, etc. などが表われる。[θ]について、ce,

se, ss, s, sh など各学年を通じて同等に多く学年による差違、著しい傾向はつかみにくい。

4. [i:]について、高1はea, eeに集中したのに対し、高3ではea, ee, e, ei, ie, などが同じ位多かった。[bəs]について、高1では-bus, -vusが殆んどであるのに対し、高3では-bous, が出る。(13%) (尤も-vousが高3にある) 語尾のSについては各学年を通じてs, th, ss, se, sh, ceなど無差別に多い。

以上のことから次のことがいえるであろう。高学年になるに従い子音に関しては improve された形跡はない。このことは耳の訓練が現実の教場で充分の効果をあげていないことを意味する。それに反して母音については学年を遡るにつれて、同一の音に対応するいろいろな spell の仕方を知るようになる。(尤もこの場合子音については音対 spell の対応が母音のそれに比較して限定される事実にも注意せねばならないだろう。)

Cテストについて

Cテスト、で用いた4つの文字群は次の通りである。

1. lathe 2. gauthine, 3. morain, 4. earkie,

以上の4つを板書して示し、各々に対応するよみ方を出来るだけ万国発音符号で表わさせ、発音を知らぬ語を英語らしいよみ方になおさせる能力を調べようとするものである。

1. について、lをrとわざわざなおしている御丁寧な誤りが各学年に2.3名づつある。この事実をもってしてもどれ程子音については関心が薄いかが明白であろう。同様にthを(z)としているものも学年に無関係に4~5名づつある。母音について注目すべき事実は高1では[ei], [a:], [ə:]がほぼ同数づつあるのに対し、高3では[ei]に集中されることである。
2. についても同様の傾向が見られる。高1ではauを[au], [ou], [ə:] その他各種のよみ方が出てくるのに対し、高3では[ə:]に集中される。thine については子音母音とも3つの学年を通じ同様のvarietyを示す。
3. について、各学年に亘りrをlになおしたり、甚しいのはrを全然omitしたりしているのが5~6名づつある。母音ではrainについても、高1では[ai], [ei], [in], 高3では、[ei]に集中される。(70%)
4. について、earでは高1[ə:], [a:], [e], [ea], [iə], [eə] 高3では[ə:]に集中(70%), [eə], [iə]が少数づつ(それぞれ4%, 2%) kieでは高1[kia], [ki], [ki:], [kai] など、高3では[kia]が圧倒的に多数を占める。

Cテスト全体についての著しい傾向は、Bテストと反対の結果を示していることである。即ち母音について

は下学年程母音のよみ方が分散し、上学年では限定されてくる傾向がつよい。子音についてはBテストと同様、学年による差違は明瞭にあらわれない。このことについて次の事実も注目に価しよう。このテストとは別にアンケート方式で、どんなつづりをまちがいやすいかを書かせた所、生徒が自覚しているまぎらわしいものはie, ei, ou, aw, その他 silent の文字 foreiner, sovereign, receiptなどで、silent ならざる子音について自覚しているものはまことに少なかった。

BテストCテストを通じてその学年による大きな傾向をつかむために高1と高3とを主な比較対象としたが、高2はその中間にあり、その傾向はどちらに近いかといえは高3の方である、ということを書き添えねばならない。

つづりと発音との関係についての定跡をよく知っていればいる程、早く正確にspellを覚えることが出来るのは明らかと思われるがこの点にも問題がある。即ち生徒のerrorの中には、ある語の正しい発音とつづりを知っていて、別な語の発音だけから spellを類推する場合、不成功に終るcaseがかなり多いのである。例えば前掲分類項の7の例をここに持ち出すことが出来る。

生徒各人はそれぞれspellのおぼえ方(もし一定の努力を払っているものとすれば)がちがう。これにはいろいろな方法がある。中学下学年のC, A, T, [kæt]式の聴覚的方法から、単語を一つの図形として視覚的に記憶する、つまり単語の顔をおぼえこんでしまう高度な方法まで段階はいろいろある。学力がすすむにつれいずれは視覚的方法によることは明らかであるが生徒は実際に、どんなおぼえ方をしているのか、そしてそのおぼえ形を用いることによりどれ程の効果を収めることが出来るかを調べて見るために次のようなテストを行ない、その結果を図表にしてみた。

テスト方法

15×50cmの白紙に単語を書き、黒板に40sec.掲示し、記憶させ撤去しテスト用紙に記入させるやり方の、いわゆるflash Card方式を利用する。単語数は10。この作業の後、上のテストに採用した自分のspellのおぼえ方を記号により記入させると共に、平常家庭において学習するときはどんな方法を取っているのかも記入させた。

つづりのおぼえ方

型	学年 人数									
		I	II	III	m ₁	m ₂	I	II	III	
Say	a						2			
	b	6	12	14	5.8		8	2	3	

	c	8	9	13	8.5	7.3	9	13	11	
See	d	2			6.5			4		
	e			1	7.5	7.0				
feel	f		4	2	6.8		9	10	9	
build	g		3	3	6.3			4		
Think	h	5			4.0					
Say-see	ab	3			5.0		1			
	bc	6		2	6.2			2	2	
	ad			2	2.5					
	bd		4	5	8.5				2	
	cd		8	4	8.8			5	6	
	be	2			7.5					
	acd	2			6	5.7				
Say-feel	af	8	2		7.3		4			
	bf	10	4	6	5.9		11	10	6	
	abf	9	2		6.8		6			
	bef	6			5.7		8			
	cf	10	13	6	7.4		21	19	17	
	acf	4	2		6.5	6.6		2		
Say-build	ag	3			7.7		4			
	bg	2	2	6	6.1		5		3	
	cg		5	10	8.0	7.3	3	5	12	
see-feel	df	2	4	2	7.3		2	8	6	
	ef	1			7.0	7.2			1	
Say-Think	bh	3			6.5					
	ch	2			4.5	5.5	2		2	
feel-Think	fh	4			6.2					
Say-see-feel	cef			2	10.0					
	bdf		2		8.0					
	cdf		3		7.0			5	4	
	bef		4		9.0					
	bcdf		2		9.0	8.6		1		
Say-feel-Think	bffh		1		7.0			2		
feel-build-Think	ffgh		3	8	9.7			3	5	

Say-feel-build	afg	2			8.5			1
	cfg		7	8	8.9		3	6
Say-feel-build-think	cfgh		2	6	8.3	8.7		4

- (a) 構成字母をアルファベットのよみ方でおぼえる。
 (b) つづり通りをローマ字式によんで、そのまゝの音をおぼえる。
 (c) つづりと発音との間の一定の法則を利用し、例外的なものだけをおぼえる。
 (d) 語の形を図形として頭に刻む。
 (e) 語の図形としての印象をぼんやりおぼえる。
 (f) 何度も手で書いてみる。
 (g) 語を構成要素に分解しておぼえる。(accidenceの知識)
 (h) 独特の記憶又は連想法を利用する。
 (i) 以上のくみ合せ。

図表の見方

spell記憶法をあらわすalphabet記号について

sayの要素	a	……構成字母をアルファベットのよみ方でおぼえる。シイ、ニイ、ティ、キヤットの類
	b	……つづり通りをローマ字式によんでそのまゝの音をおぼえる。
	c	……つづりと発音との間の一定の法則を利用し、例外的なものだけをおぼえる。
seeの要素	d	……語の形を図形として頭に刻む。
	e	……語の図形としての印象をぼんやりおぼえる。
feelの要素	f	……何度も手で書いてみる。
buildの要素	g	……語を構成要素に分解しておぼえる (accidenceの知識)
thinkの要素	h	……独特の記憶法又は連想法を利用する。

(say, see, feel build, think) の5要素については注2を参照) 最上段の I, II, III は学年を, m_1 は当該記憶法を利用したものの成功率 (つまりテストの成績) を10点満点にして平均したものであり, m_2 は say, see...etc. などの5要素にまとめた成功率平均をそれぞれ表わし, その右の I II III は各学年の家庭での方法利用度を百分率で示してある。

図表を見てわかること。

1. は下学年に多い。中学初級では大いに利用される方法であるが, short word については有効確実であっても, big word においてはその効果は疑わしいし, 時間も要する。

2. b は上学年に多い。このようなテスト形式では短時間の記憶保持で充分であり, しかもこの方法は最も手

取り早い有効な方法であることを要領のよい高学年の生徒は知っていた結果であろう。事実 b の方法は家庭での学習ではあまり実施されていない。ただしこの方法は記憶保持時間の長さという点ではまことにその効力は疑わしく, テストが済めばすぐ忘れ去られてしまう恐れが大きく, その上正しい発音という点からみても感心しない方法である。

3. 2と対照的なのは f の方法である。時間はかゝるが確実な方法である。このテストにおけるよりも家庭の学習で利用される傾向がつよい。なおこのテストでは練習用紙を与えなかったため, f とは机上とか空間に指で書いておぼえる方法を指すわけである。

4. say, see, feel の三要素 (又はそれに build の要素を加えたもの) を併せ備えた方法が最も成功率が高いようである。記号の組合せでいえば cef, bdf, cdf bef, bcdf, (又は afg, cfg) などである。

5. build の要素, つまり g の方法は高学年にいくにつれて増加し, constant にすぐれた成功率を示している。ただしこの方法はある程度の単語の accidence についての知識, 語源的知識を要するのでどんな場合にも, どんな生徒にも利用できるとは限らない。しかし教授者は折にふれて語源的知識を与えることも有効な手段として必要なのではなからうか。

6. つづりをおぼえるという点だけからいえば C の方法が最も望ましいものの一つであろう。この方法はこれだけ独立して用いてもよい位である。ただし発音という点からは, 例外的なものの場合, これだけでは不充分であろう。

7. d についていえばこれだけ一つを用いるのは不充分であり, c と d を組み合わせてこそ両者の効力を十分発揮できると考えられる。

8. h について, この方法は特殊な単語以外には成功しない。

注1. Bテスト Cテストにおいて英語語彙に存在しない音素材を用いたことにつき, 江川泰一郎氏は第三回教育研究大会において次のように批判された。『original で, 実験的には面白いが, 教育的にはどうかと思う』と, けだしわれわれのねらいは, 正にその実験にあったわけで一年と三年では単語の知識に相当のべだりがあり既知の単語が問題として出題されれば純粋な結果得をられない, と考えたからに他ならない。

注2. Harry Shefter: 6 minutes a day to perfect spelling. (Washington Square press, 1954)
 この本の中で著者が提唱する spell 記憶法が5

つあり、それぞれ say, see, feel, build, think の標題の下に説明されているが、それがたまたま本研究における分類a~hまでのいづれかに該当するので、こゝに借用することとした。即ち sayは、聴覚的方法をseeは視覚的方法をfeelは何度も書く方法をbuildは語構成法をhは連想法をそれぞれ意味している。

以上のべたように、say, see, feel, build, think の5要素のうち、いづれかの三つ以上を組合せたものが最も高度の成功率を示すことを知ったわけであるが中でも、say, see, feel及びsee, feel, buildの三つの組合せが最も望ましい結果を表わしている。(記号で例をあげればcdf, cfg, dfg, など)

所がbの方法、つまりつづり通りローマ字式によんでそのまゝの音をおぼえるやり方、psychology をプシキョロギイと記憶する方法を採用した生徒が特に高学年に多く、しかもその成功率が思いの外高度であることを知った。この事実が次のように考えられる。即ち高学年の生徒は、このようなテスト形式に対して要領のよい方法をもって対抗したわけである。このテスト形式では記憶の保持はテストがすむまでのごく短時間で事足り、そのためにはbの方法が最も効果的なやり方であることを生徒は心得ていたわけである。所が実際問題として spellをおぼえこむに当って、短時間の記憶保持では無意味であり、かかる方法は、それ故排斥されるべきものである。そこで次の段階としてspellの記憶の retention が問題になるわけである。それぞれのおぼえ方によった場合、どれだけの時間、記憶を保持できるか、明らかにすることが今回の調査目的である。

調査対象・方法

奈良女子大学文学部付属高校1~3年全員。純粋な形で記憶の retention をつかむことはむずかしい。何故なら、記憶法との対応関係を見るのが目的であるから、1回目と2回目のテストで同一の生徒が異なった記憶法を用いる場合意味をなさない。又一定分量の単語を与え、家庭で学習させた結果をテストするやり方も同様の理由により純粋さを保つことは出来ない。そこで試みられた方法はおよそ次の通りである。

黒板に5個の単語を4分間掲示する。各学年共通の問題である。又同学年のあるクラスでは練習用紙を与え、他のクラスでは与えない。練習用紙を回収し、テスト用紙をくばり、記憶した5つの単語のつづりを書かせると共に、自分の採用した記憶方法を記入させ提出。以後20分後、40分後1週間後に同じ5個の単語を書かせる。これらの場合単語の掲示は最初だけで、あとはすべて記憶によらせる。すべて授業を進行させつつ、テストをはさみこむ。

統計処理

以上のような方法によって得られたテスト結果を集計して各種の図表を作り次のような事項について調べてみる。

調査事項

1. 単語とおぼえ方——どんな単語はどんな方法が成功率が高いか、即ちおぼえ方と retention との関係、時間の経過によりどの程度記憶を失うか。
2. 学年と単語——学力がすすむにつれ、単語によって方法を柔軟に変えるようになる。
3. 練習用紙の効果——クラス全体の平均においてどれ程のちがいとなってあらわれるか、又単語によっても練習用紙の効果は異なるか。

図表 1. 方法別 retention の度合 (mistellaneonsの場合)

学 年 メソッド	高 I					高 II					高 III				
	1	2	3	4		1	2	3	4		1	2	3	4	
a															
b	7	4	3	0	0	13	10	7	7	1	9	8	6	7	0
c	8	5	4	4	0	3	1	1	1	0	11	5	4	5	1
d	2	0	1	2	0	5	2	2	2	0	5	2	2	3	1
e						1	0	0	0	0					
f	10	0	0	0	0	6	4	4	4	2					
g						9	7	7	8	5	15	13	13	14	13

h	6	2	2	2	0	2	1	1	1	0					
ad	8	2	3	0	0										
bd	2					4	2	2	2	0	6	4	4	3	1
dc	7	6	5	6	0	5	3	2	2	0	2	1	1	1	1
eb	6	4	2	0	0						1	0	0	0	0
fa	6	1	0	0	0										
bf	4	0	0	0	0						1	1	1	1	0
cf	3	3	3	3	0	4	2	3	2	3	2	2	1	1	1
bef	4	3	3	3	0										
bg	3	1	1	1	1	10	9	9	7	5	14	13	13	13	11
gc	4	3	3	4	3	6	6	6	6	5	16	14	13	13	14
df	3	3	3	3	2	6	3	3	4	3	4	3	3	3	2
ef	6	4	2	3	0	4	2	1	1	0					
bh	1					2	0	0	0	0	2	0	0	0	0
ch	4	2	2	3	0	3	1	1	1	0					0
fg						5	2	2	2	0	4	2	0	0	0
bdf											2	0	0	0	0
cdf											1	0	0	0	1
bef	1	1	1	0	0										
bfh	3	0	1	1	0										
fgh						3	1	1	2	0	2	0	0	0	0
cfg	1	1	1	1	0	4	1	1	2	2	4	0	1	0	2
dg	1	0	0	0	0	5	4	4	4	3					

図表 2. 方法別 retention の度合 (indelscribability の場合)

学 年 ア ス ト 番 号 お よ び 方 法	高 I					高 II					高 III				
		1	2	3	4		1	2	3	4		1	2	3	4
a															
b	13	0	0	0	0	15	8	7	7	2	12	11	10	10	3
c	7	0	0	0	0	4									
d											2	0	0	0	0
e											2	0	0	0	0
f	4	0	0	0	0	2									
g	2	1	1	1	1	10					23	21	21	22	22

h																			
ad	9	0	0	0	0														
bd													4	0	0	0	0		
cd	1	0	0	0	0								3	0	0	2	1		
be													4	0	0	0	0		
af	5	0	0	0	0														
bf	12	0	0	0	0	9	8	5	5	4			2	0	0	0	0		
cf	7	0	0	0	0	10	3	1	1	1			1	0	0	1	0		
bef	1	0	0	0	0														
bg	2	2	2	2	1	8	7	6	6	6			11	10	10	11	11		
cg	2	2	2	2	2	10	8	8	7	7			19	17	18	19	19		
df	4	0	0	0	0														
ef	1	0	0	0	0														
bh																			
ch																			
fg						4	2	2	3	3			6	4	5	4	0		
bdf																			
cdf	2	0	0	0	0														
bef	2	0	0	0	0														
cef	3	0	0	0	0														
bfh																			
fgh	1	0	0	0	0	3	3	2	2	2			5	4	4	3	0		
cfg						6	5	5	5	5			4	3	4	2	1		
dg						4	4	3	3	3			2	2	2	2	2		
備考	記入 ナシ 若干					記入 ナシ 若干													

上掲の図表及び次頁の図表は調査事項1. 単語とおぼえ方の関係・その成功率・記憶保持能率を調べたものである。すべての出題単語について図表を作製するのはあまりに煩雑であるので、こゝには typical であると思われる二つの単語、miscellaneous 及び indescribability によって代表させることにした。又練習用紙の有無については、それを与えたクラスでは spell 記憶の方法がかたより、限定されてしまうので、(図表4参照)こゝでは練習用紙を与えなかったもの(図表3参照)を統計した。その方が spell の記憶方法において variety に富むからである。

図表の見方

最上段に横に並ぶ数字1,2,3,4,は各学年のテスト順番号を示す。各学年最左端の数字は、あるおぼえ方を用いた生徒の数を百分率で示してある。それがテストを経るに従い、つまり時間を経過するに従い、漸減する様子を見ようとするわけである。

1. bの方法を採用しているものがやはり多い。但しこの方法によれば第一回テストでは割に成功率が高いが除々に記憶を失い、一週間を経た第4回のテストでは殆んど正答したものがなくなった程である。特に“miscellaneous”についてはb系統の記憶方法は適当でない

思われる。

2. b 系統の記憶法が案外成績不振である。この傾向は特に、f のみで他の要素を混えない場合に著しい。このことは練習用紙が与えられていないという事実を考慮せねばならない。前年度の結論の一つであった、Say, see, feel. の三要素（例えば cdf）が振わない原因は、問題である単語の種類によると考えられる。即ち前年度に与えた単語に比べて今回はなじみのうすい、頻度数の低いもの、長いつづりをもつ単語、生徒にとって難しい特殊なことばであったためであると思われる。文字（letter）数の比較的少ない単語については、cdf が最も望ましい方法であろうが今回のような、いわゆる big word の場合、cdf に固執するのは望ましい効果をあげ得ないと思われる。

3. このような big word の場合、最も望ましい方法は g 系統、つまり語をその構成要素に分解して accidence の知識を借りて記憶する方法である。但しこの方法はあ

る程度の単語の知識又は語源的知識を必要とするので、すべての生徒に普遍的に妥当な方法であるとは言い難い。一定の英語学力に達しないものには不可能であろう。この傾向が顕著なのは indescribability においてである。この場合は describe という語さえ知っておれば殆んど充分といえるのであって、あとは否定の in, 可能をあらわす形容詞語尾 able, 名詞語尾の -ty だけを記憶すれば足りる。

む す び

以上のことをまとめて次のことがいえると思う。big word においては、g 系統の記憶法を利用し、比較的短い単語では cdf などが望ましい、ということ。次に fg の成功率が案外ひくいのをみれば f の要素と g の要素とは両立しにくいのではなからうか。機械的な f の方法と分析的な g の方法を同時に利用することに能率の上である種の無理があるのではないかと考えられる。

図表・3 単語別方法の変化（練習用紙なし）

方法	高 I					高 II					高 III				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
a															
b	9	7	10	8	13	12	13	10	11	15	15	9	16	7	12
c	4	8			7	8	3	9	8	4	12	11	8	7	
d	3	2				10	5		5		11	5	3	3	2
e						3	1								2
f	11	10	7	11	4	8	6	3	5	2	5			2	
g			7		2		9	15	2	10	3	15	20	4	23
h	8	6	5			7	2	7	4		1		2		
ad	9	8	6	4	9										
bd	5	2		6		5	4	6	5		13	6		1	4
cd	5	7	7	5	1	10	5	10			13	2	9	7	3
be		6	2			1		5				1	7		4
af	9	6	5	7	5										
bf	6	4	2	8	12	5			4	9	7	1	1	1	2
cf	5	3	5	6	7		4		5	10	7	2	1		1
bef	3	4	1	4	1	3									
bg		3	7	7	2		10	8	15	8		14	12	14	11
cg		4	8	8	2		6	11	16	10		16	10	15	19

df	6	3	4	5	4	10	6				8	4			
ef	2	6	2	3	1	1	4				1				
bh	4	1		2			2	3			3	2	4		
ch		4				6	3						5		
fg			7	5			5	1	8	4		4	1	3	6
fh	3								1				1		
bdf	3		6			2						2			
cdf	4		3	4	2	1						1			
bef	1	1			2									17	
cef					3									10	
bfh		3													
fgh				2	1	2	3	1	1	3	1	2			5
cfg		1		3			4	1	2	6		4	1		4
dg		1	6	2			5	10	8	4					
備考					記入なし若干					記入なし若干				9	2

1=adjacence, 2= miscellaneous, 3= electrification, 4= lithography, 5= indescribability,

図表 4 単語別方法の変化(練習用紙あり)

方法 \ 学年 単語	高 I					高 II					高 III				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
a															
b															
c															
d															
e															
f	20	22	25	19	22	15	13	5	3	10	11	18			1
g															
h															
ad															
bd															
cd															
be															
af	19	11			8	7	1		8		5	2			
bf	25	14	22	18	32	10	11	16	10	29		10			25

cf	10	18	28	19	22	8	23	20	24	15		26	25	18	20
bef		7										5			
bg															
cg															
df	20	13	4	16		31	18	20	17	7	46	13	22	24	6
ef	4	9	2	12		10	8	6	12	4	20	4		16	2
bh															
ch						1							2		
fg			15	14	2	2	10	31	26	25	5	15	43	35	41
fh	2	4	4	2		6					4				
bdf		2				6	8			4	8	4		4	
cdf					1	4	5			3	1		8	3	
bef					8										
cef															
bfh					5										
fgh															
cfd							3	2		2		3			5
dg															

1=adjacence, 2=miscellaneous, 3=electrification, 4=lithography, 5=indescribability,

図表3及び図表4は、単語によって記憶方法を変える状態を学力との関係においてみること、即ち、学年が進むにつれどんな風に柔軟に方法を変え得るかを調べるために作ったものである。

図表の見方

上段横に並ぶ、1 2 3 4 5 はそれぞれ、adjacence, micellaneous, electrification, lithography, indescrabilityを表わし、最左端のAlphalet記号は、或る単語についてそれぞれの記憶方法を利用した生徒の数を百分率で示してある。

図表でわかったこと。

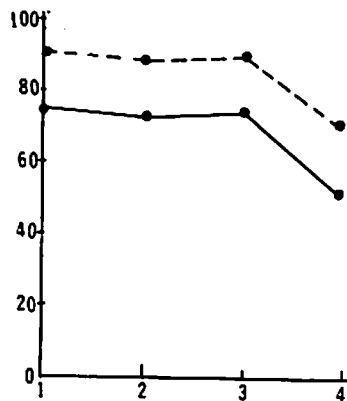
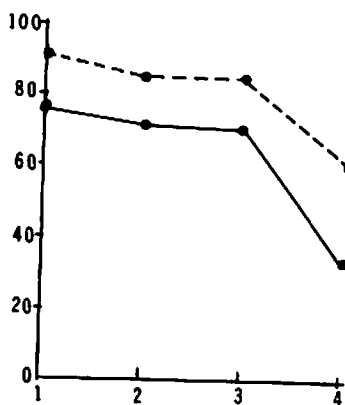
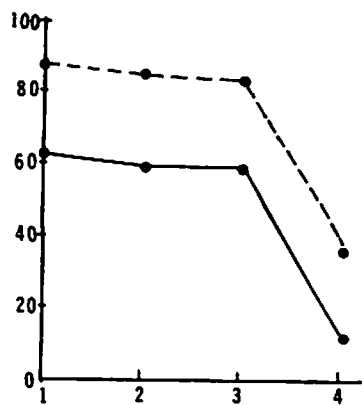
図表3は練習用紙を与えないテスト、図表4はそれを与えたテストである。先ず、図表3について学年が進むにつれて、記憶方法に著しい集中性が見られることである。具体的には図表において、大きな数字が高3に於て特に表われているのである。高1に於ては、単語が異なることにより、方法を巧みに変化させ得る融通性に乏しく数字が分散してしまった。electrification, lithographyにおいては、やや統一が見られるが、他の3つの単語においては著しく分割されている。1,2,5.の単語は、自分

の従来の英語の知識の中に手がかりをつかみ得ないものであるから、どんな方法を用いるべきか当惑するのも当然のことかも知れない。

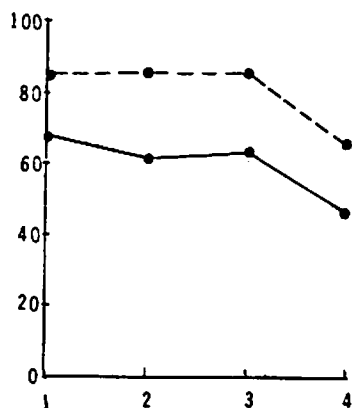
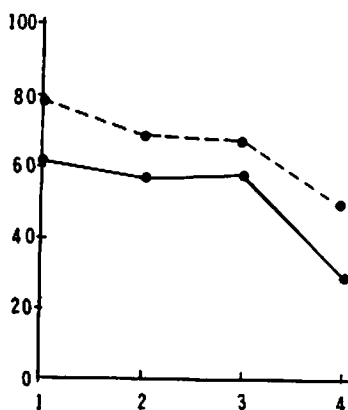
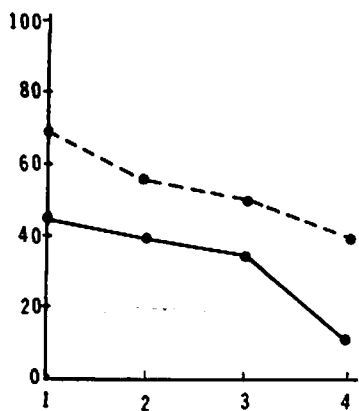
次に図表4を見ると、練習用紙を利用しなかった生徒は皆無であるから、何回も書いて憶える方法、即ちf系統に数字が集中するのは当然である。fだけに頼ったものは、高学年になるにつれて減少し、df, efにおいては逆に増加している。事実、手で書くだけで憶えるのは方法として弱いようである。fの方法はsee又はsayの要素を加えることによって、その効果を十分に発揮するものと考えられる。

fgも学年が進むに従い、飛躍的に増加する。特に3,4,5.の単語においてこの傾向が著しい。この場合注意せねばならぬことは3,4,5.の単語ではfの要素とgの要素が等価に用いられたのではなく、前者より後者の方に遙かに重点が置かれているのではないかということである。というのは、方法別による記憶保持率を見ると、練習用紙を与えた場合のfgはまことに好成績を示しているからである。

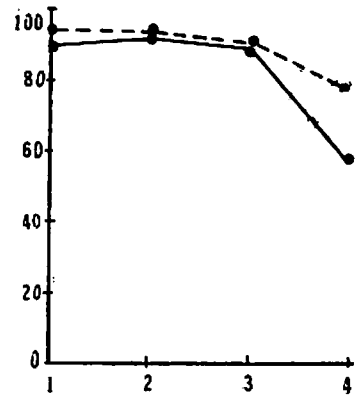
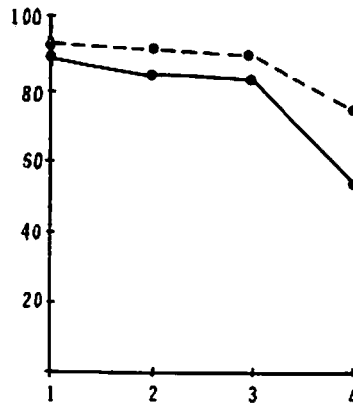
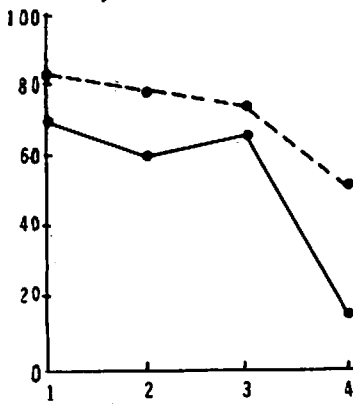
adjacence



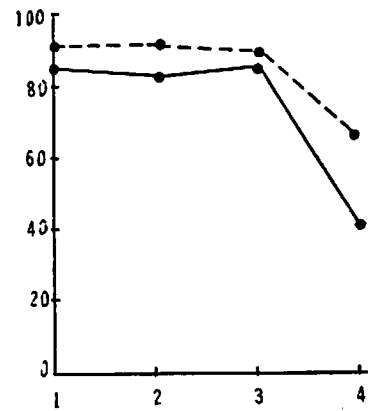
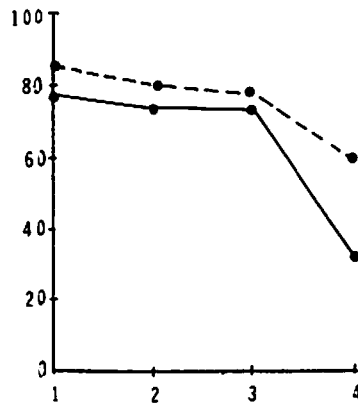
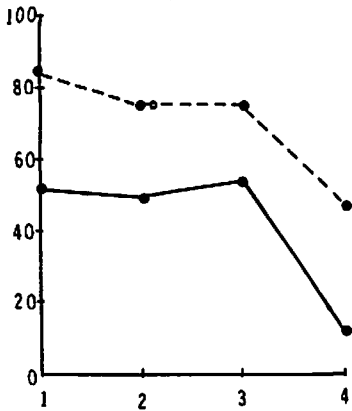
miscellaneous



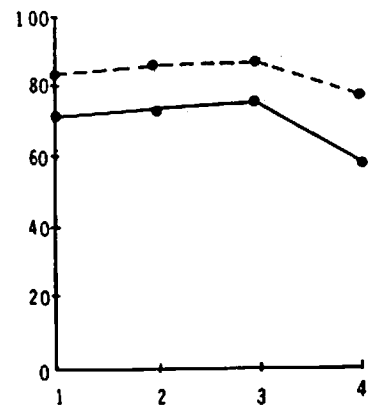
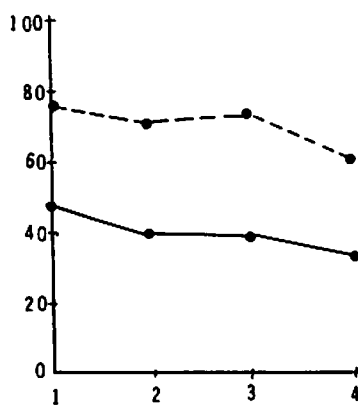
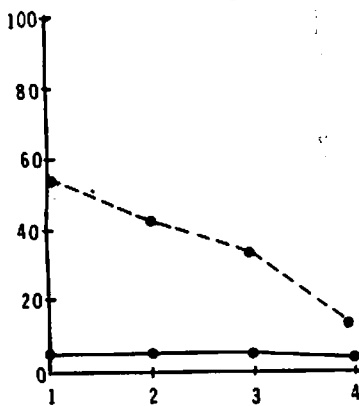
electrification



lithography



indescribability



図表5は、問題の五個の単語について、それぞれの記憶の減衰の様子をグラフにして学年別に見ようとするもので、特にこゝでは練習用紙の有無がどの程度記憶保持に有効であるかを調べてみようとするものである。

図表の見方

テストの順番号を横軸に、(1234)、正答数を百分率にして縦軸に取ってある。点線は練習用紙を与えた場合、実線はそれを与えなかった場合をそれぞれあらわす。

図表を見てわかること

1. 練習用紙を与えた場合と与えない場合との最も大きな特徴は、一週間を経たテスト(第四回テスト)において差がはなはだしくなる、ということである。前者の下降傾向と後者のそれを比較すれば、後者のプロフィールの勾配が急である。つまり何回も書いてみるということは記憶保持上大へん有効な手段であることがわかる。この場合注意せねばならぬことが二つある。その一つは記憶のために生徒に与えられた時間は練習用紙の有無にかかわらず同一であったということである。同じfという方法でも、同じ単語を書いてみる回数は練習用紙の有る場合の方が少ないはずである。それにも拘らず用紙を与えられた方が如何なる場合にもはるかに好成績を収めている。その二は、用紙を与えた場合のfという方法は、実は純粋なfではない。何故なら紙に書くと同時に書かれたものを見てもいるのだからである。従ってこの場合fというのは実はdf又はefの分類にはいると考えるのが適当である。図表4において高1から高3にかけてfが減少しているのは、高学年の生徒がこの事実気づいた

結果であるとも考えられる。

2. 1, 2, 3, 回目までのカーブは概ねゆるい下降線をえがき、4回目に至って急下降する。2回目と3回目の間には概して落差はなく平坦である。中には上昇さえしているものもある。この上昇の事実は予想されなかった現象である。考えられる説明は、テスト後辞書などを引いて調べたか、或いは何らかの連想又は心理的脈絡が、しばらく時間を経過して後はじめてなされたか、などであろう。

3. 学年による差異についていえば、高1と高3では前者の方が下降勾配が急であり、学年を経るにつれて平坦になる。特にelectrification, indescribabilityなどの、語源推量の容易な単語についてその傾向が著しい。高2はどちらかといえば高3に近い。このことは単語に関する限り全般な傾向である。テストの時期が学力の結実期である二学期であったことも併せて考えるべきであろうか。

以上のことから考えてg系統の記憶法を充分活用できるために、可能な限り教授者は折にふれて生徒にaccidenceの知識・語源的な説明を行なうのがよいのではなかろうか。

4. 学年による落差は練習用紙の与えられる場合より与えられない場合の方が大きい。練習用紙の使用により学力のちがいが平均化されたことになる。つまりf系統のような機械的な操作による記憶法は学力の高低に関係することが比較的少ないと考えられる。

高校生における学友関係の実証的研究

その1、本校生の悩みにおける学友関係の一考察

その2、本校生の学友関係の実態に関する一考察

その3、本校生の学友関係の集団場面に関する一考察

横 山 一 郎

1. 研究の目的

高校教育が社会力(Social force)とどのように対していくべきか、又社会力をどのように受け入れていくべきか、再吟味する必要があるようである。

近年、学校教育のあり方については、いろいろの特性が含まれるが、その目標の前面に人間形成をあげているところに大きな意義をみいださなければならない。人間形成の用語が抽象的であるが故に、教育の場ではややもすれば具体的事象のために、人間形成は側面においてやられてしまうこともある。

又これらの目標の変化の過程にみられるような偏知主義と人間形成の対比の研究が現在のこれらの教育目標の意義を明確に位置づけているようでもある。

しかし現実には意図的教育としての学校教育において、しかもとくに高校における「現実の働きかけ」は人間形成の教育の業績に足ぶみを強いているような面のあることもみのがすことはできない。

価値的には人間形成をとえながら、又偏知主義の病害を理解しながらも、ある場合にはそれに間接的寄与を加えながら足ぶみをさせるような矛盾を存在させているようである。このような矛盾の現象は social force の複雑さと学校教育の複雑を痛切に味わい、せけれない「現実なのだ」と云う用語で、その内容への近接した働きかけをわすれた姿を浮きぼりにするようである。

学校教育を「現実の諸関係の中から、新たな発展の可能性を見出し、その可能性とのかかわりで学校教育を

考えるか、現実の諸関係の中に埋没し(とくに学校教育の歴史的な考察における問題提示にとどまり)、学校教育を場あたりの現実に適用させようとしているか」の立場を明確にする必要がある。これらの立場の明確さが social force の受けとめ方と関連をもってくるものであろうから。

人間形成をとえながら限りにして現在の学校教育を直視し、歴史的に基礎的社会と切り離された存在から、教育実践の現実態と社会進歩の方向とを統一的にとらえる必要がある。

現実態としての進学、就職の問題(学校教育の現実の全てという意味ではないが)そのとらえかたにおいて多様であるにしても、現在のとくに高校教育に影響を与えている(影響の与え方については各分野研究がある)ことは否定できない事実である。

そしてその影響の与えられたが、既述の矛盾を生じせしめている大きな因子と思われる。が、それら矛盾の中で学校教育が進行していることを考えると、その矛盾や、それらの問題の所在を明かにすることに努力をはらわなければならないだろう。そうすれば現在の高校生活の断片、あるいは統一の正しいとらえかたもできてくるのではなからうか。

進学、就職の問題についてもこれを歴史的に位置づけて考察するとき、現在のようにこれらがあつてみられないような国民的関心事となったのは我が国においては特殊な歩みをみたにしても、大正末期から昭和の初めである、それ以後徐々に学校教育への影響は大きくなり二

- 1) A.K.C.Ottaway Education and Society 福永安祥訳(教育と社会)1953.p79関書院
- 2) ① 波多野完治 現代教育学(教育学概論)1961.pp2~岩波書店
② 清水 義弘 " " " pp59~ "
③ 清水幾太郎 " (教育哲学)1960.p40. "
④ 長田 新 " " " pp209~213 "
⑤ 上原 専禄 " (教育思想)1961.pp314~315 "
- 3) 阪本 一郎他、個性の診断、教育診断選書1961.pp7~8 牧書店
- 4) 川合 章、教育実践の組織化と教育研究、現代教育学、1961、第17巻pp114~115岩波書店
- 5) 清水 幾太郎、社会的人間論、1954、p39、pp77~89 角川書店
- 6) 小川 利夫、進学と就職、現代教育学、1961第16巻pp26~27 岩波書店
- 7) 宮坂 哲文、進路指導の現代的意義、国民教育と生活指導、1960、pp149~153 明治図書

種類の青年期を生じせしめたり、もろもろの新しい現象を生じせしめている。

近年の進学率や教育の国民的最低限の移行は青年期の分裂、自殺、不良化、学習意欲、学力のゆがみ、生徒間の分裂など時代の変化という尺度からだけでは説明できない数多くの問題をなげかけている。

また時代の変化、教育目標の変化は家族集団や、学校集団の人間関係においても多くの変化を生じせしめている。

勿論、各集団の機能の減退が人間関係にも変化をおよぼしていることは言うまでもないが、これらの変化は中学から高校への生理学的、心理学的、社会学的、もろもろ学習者や環境の現象の把握やその指導において、新しい知的働きかけを要求している。

社会のもろもろの因子と関係をもちながら個体はそれの因子と関係をもったり、あるいは独自の働きを発現している、それらが、人間形成材料として現に存在している以上繰りかえし確認しなければならない「近接」を。そしてその近接にあわせ直接的に social force をあきらかにすることを目しなければならぬ。

一方知識として人間形成に関する学習は、意図的、無意図的に（観念的な面であろうが）実施されてきた。中、高校期はこれらを価値感として受けとる時期でもある（青年期の価値的欲求の高まり、一論理、倫理、審美など一を意味する）、現在の学校教育では表面的には人間形成をかかげ、その場が（人間形成にはまずその場を与えることが必要である。一大学学長会議発表一）が失われてゆくことにはあまり神経質でなく、むしろ近視眼的事象にはヒステリックである。中学、高校期に内部的⁵⁾世界を経験しはじめるにしたがいもろもろの悩みにそうぐうする、数量的表現になるがそれらの悩みに加えて、理想と現実の問題とにあまりにも明白な自分達の生活環

境の学校に目をむけさせる。そして理想と現実の距離感をいだかせ、それらの距離をせざる努力を青年期の特性であると云うことで期待する、しかし距離感の認識よりも以前に彼らをそれから遠ざける結果となっていることはないだろうか。

その結果は悩みをもたない幼発的⁷⁾青年期をすごすことを生じさせ、精神衛生的多くの問題を現実⁶⁾に、そして将来に多く残すことになる。又この事象と併合して教師集団と生徒集団で価値感や、教育活動に認識の差を生じせしめていることは考慮する必要がある。

この両集団に差が存在することは人間形成の教育を施すときにはとくに障害が大きいといわれなければならない。内面的距離感が応々にして權威の否定（青年期に）出発しているとすれば この両集団の巾をうめることの努力は大変なことであるが、この巾が縮まる方向へ向わないとすれば学習から出発した教育はその内容を失ってしまうだろう。

今まで学校教育全般から、学友関係との関連事象の把握につとめてきたが、学友関係を糸口にして social force の究明や関連がいくらかとらえられるようである。social force を学校教育の目標とたえず一致させることはある場合には必要なことである。しかしそこには価値感の共通化を前提としなくてはならない、そしてその価値感⁸⁾は青年期の自我の目芽とともにその多くが⁹⁾出発することこれからある意味では将来の共通化の見通しはあかるい、人間形成の教育が単に形式に流れずに実質をたえずたくわえることに研究がはらわれるならば……。教師集団と生徒集団の巾が存在する場合、あるいはこの巾が狭ばまる方向へ向ったにしても学友関係の存在は重要視されてくる。それはある場合には指導の手段として生かされようし、個人にとっての精神衛生的価値、および社会問題との関係においてもである。これらの価値について

1) 小川 利夫, 進学, 就職問題と教育における疎外状況, 現代教育学1961, 第16巻pp28~30

2) 小川 利夫, 進学, 就学問題と教育の国民的最低限, 現代教育学,

3) とくに家族集団の機能の減退について清水幾太郎氏は社会的人間論p102で記している。

4) ここで用いる意味は一般に用いられる異常とさすのではない、ヒステリー反応の意味である

島岡 安雄 } 精神の疾病, 障害, 保健体育学講座1958, 第2巻p464 体育の科学社 (を参照されたい)
菅又 淳

5) 依田 新, 内界の探究と悩み, 青年心理学講座3, 1959, pp3~5 金子書房

6) 依田 新, 内界の探究と悩み, 青年心理学講座3, 1959, pp29~30

7) ドベス吉倉範光訳, 青年期, 1951, pp127~132白水社

8) ⑦ ウィラード, オォラー (石山修平訳) 学校集団—その構造と指導の生態—1957, p350~ 明治図書

⑧ 中森 孜郎, 教育についての意識, 現代教育学1961, 第18巻pp168~176

⑨ 津高正文, 教師と生徒, 現代教育学, 1961, 第16巻pp258~260

⑩ 鈴木 清, 教師への反抗と崇拜, 青年心理学講座, 1959pp35~44pp59~63

⑪ は内面的なものとして⑦~⑩とは立場を異にするが、中、高期に巾を生じせしめる因子としてとりあげた。

は多くの研究がなされているし、又その価値の有意性も認めている¹⁾。その研究の中でも、とくに心理学の世界での取扱い方に歴史的に若干の変化をみせているようである。この変化が「個人の内面と外面の緊張関係から生じたものが」、あるいは「外面からの力が内面のありかたを圧しているのか」を明かにする必要があるのは不自然なことではないだろう。そこにどのような友人関係が存在しているか¹⁾、からを導入し、それを問題児の指導場面のみに用いず、「悩みの解決場面に利用するにはどのようにすればよいか」、「学校教育の中で友人関係促進の場はどこか」、「学友関係の中で我々が意図しなかった教育効果(効果と云う用語を適切でないかもしれないが)はないか」などをあきらかにしてみたい。それが人間形成の教育場面にして有効であることは、人間形成を主目的としなかった教育形態においてもあきらかに人間の人間たるためには必要なことがとられている。「人間とは」と云う焦点が学校教育でも問題にされたしたのは、そんなに古いことではない。人間の規定が一部の集団をさす用語として使用された歴史は古い。しかし、子供、有色人種、女性などが人間にして考えられるようになったのは20世紀にはいつてからであると云っても過言ではないであろう。そこには今まで考えられていた「人間としていた集団における友人の重要性」と、人間の層の広がりを見た現代の人間における友人関係が同様であるかということに、又一度焦点をむける必要を感じるものである。かつて高校が社会のエリート層に位地していたときの友人よりも、現代の高校進学¹⁾の低辺があがってきた、多くの個人差をもった集りはその友人関係においても異質であろうし、又その関係は社会の人間関係への発展的寄与をも可能にするであろう。男女の友人仮設を関係などとくにこの対象となるものと考え。これらの社会調査、実験をくりかえしながら、統計の処理だけにまよわされず、検証をくりかえしながら、こつこつと積み重ね、継続的に研究してみたいと思う。この目的はこの研究が終るまでの目的でもある、しかし段階的には自己の研究の進め方が一人よがりになりすぎではいけないと思うし、一部でも資料の発表などしていくことがあると思うが、たえずこの目的が、その内容に満たされると

は思われない、とくにこの紀要の原稿になった部分はその出発的地位である。実態の把握に観点をしばったつもりであるが、実態の把握についても一面的把握の感をまねがれない、継続的研究の研究目的は、しかし研究の希望になる。

2. 研究方法

- (1) 質問紙法による調査
- (2) 観察法による調査
- (3) 事例研究法、面接法による調査
- (4) ソシオメトリーによる調査
- (5) 文献研究

3. 各調査の項目

(1) 質問紙法

- ㉞ 高校生の悩みがどのようなものがあるか、その統計的位置づけ、および学友関係に関する悩み、と悩みの解決法としての学友関係の位置づけをこの調査で知る。
- ㉟ 学友関係が数量的にどのように規定されるか、それが情緒的結びつきとどのような関係をもつかを調査で知る。
- ㊱ グループ、ダイナミックスと情緒的結びつきの関係、および、クラブ、ホーム・ルーム活動と学友関係促進因子との関係を知る。

(2) 観察法

- ㉞ とくにクラブ集団などの活動を対比できるように観察する(特別抽出なし)
- ㉟ 休けい時間の特定グループの観察(抽出)

(3) 事例及び面接法

ソシオメトリーの確認とクラブ活動、学友関係変化を知る。

(4) ソシオメトリー

学友関係促進の場がどこにあるか、どのような運営と関係があるか、場理論との関係を知る。

調査方法

1. 教育研究所や、他校の悩みの調査を参考に質問項目を設定し、質問紙法で調査をおこなう、質問紙

- 1) ㉞ 依田 新、内界の探究と悩み、青年心理学講座、1959, pp18~21
- ㉟ 古箱 安好、学友関係的要因、教育心理1956, 第4巻p26
- ㊱ 清水幾太郎、社会的人間論、1954, p110
- ㊲ 石崎恒次郎、現代教育社会学、1956, pp140~157 理想社
- ㊳ 望月衛、青年心理学、1951, p. 71 光文社
- ㊴ 阪本 一郎他 人間関係の診断、教育診断法選書、1961, p163.
- ㊵ 東京教育大学付属高校研究紀要 友人関係の促進と人権意識を向上させるための読書指導1959
- 1) 豊沢登、新しい生活指導の技術、1954, p1 栄生書院

法では制限応答式を併合し、制限応答式では択一式で行う。

2. 友人関係（同学校、同学年という規準で学友関係と同意に解釈）の質問紙による調査をおこなう。
3. ソシオメトリの無制限応答を用いた調査をおこなう。

調査の期日及び対象

1. 悩みの調査、35年9月

集計基準

性別、学年別、集団別、及び質問項目

2. 友人関係の実態35年9月
3. 学友関係の場に関する調査 36年6月
36年10月
37年12月

奈良女子大学部付属高等学校

1. 男子 70名 女子 79名
2. 男子193名 女子227名
3. 男子 68名 女子 71名

① 悩みの実態

— 1 —

アンネ、フランクのアンネの日記、ヘルマン・ヘッセの車輪の下などの主人公が感じたとような内部的世界 (Innenwelt) が今日の高校生の中にも青年期の本質の特徴にして位置を占めていると考えられるであろう。

自我の発見から、自分のからだ、自分の能力、が自己の姿としてうつしだされ、自分の評価をたえず意識しはじめようになる。自己の評価がたえず劣等感や、無力感をともなうにしても、価値的欲求の高まりは自己の内面的不可解さに直面させるようである。

孤独、自己疑想、自己弁護、自尊心過剰、復讐、自己嫌悪、これらは自我の高まりとともに必ずといっていいほどの過程において伴って発生し、交錯するものであると考えられる、ここから必然的に悩みを生ずると考えてよいであろう。

理想と現実との距離にきずき、これを何とかうめたいとする努力が悩みを生じさせると考えていいようである。あくまでもそれは理想実現への過程における現象であり、悩みをなつがしがる時、あるいは要求水準の低いきは悩みが生じたことを表がきしていると考えられる。これらの意味において青年期の悩みは理想実現への接近と考えてもよいであろう。

表1にみられるように勉強に関する悩み、そしてその内容も勉強の仕方、勉強と注意集中に高い%がしめされている。自分の絶対的能力が否定したくない、安定や自己の評価、価値への敏感であり、方法の上で解決したい希望がこの中にしめされているように、青年期の特徴と考えていいだろう。又成績と努力の関係についても相当の%があるのは学業そのものに対する考えかた、および、上述の他へ向けるのを自己の内部でとどまらせている場合などが、一面これらの要因の存在を必要

表1. 悩みの実態 その1

項目 内容 N % 性別	A. 勉強のことにに関して										B. 健康や容姿に関して										C. 自分の性質に関して									
	N ₁	勉強の仕方について	成績と勉強の関	係強と注意集中	強とクラブ活動	受験勉強と好き	手伝と勉強の関	係	その他	N ₁	身体と劣等感	体格と劣等感	健康増進について	容姿について	健康に対する自信	運動神経について	その他	N ₁	何事につけても	他人に劣等感	社交性に乏しい	短気、安易性に乏しい	ひねくれている	意志薄弱である	神経過敏である	その他				
中学一・二年	男	102	119	30	29	40	10	2	2	6	57	20	7	11	2	5	7	5	94	10	22	16	6	13	22	5				
			100	25.2	24.4	33.6	8.4	1.7	1.7	5.0	100	28.5	12.3	19.3	3.5	8.8	12.3	8.8	100	10.6	23.4	17.0	6.4	13.8	23.4	5.3				
	女	93	114	41	30	30	8	1	0	4	52	7	3	9	10	8	13	2	95	22	14	15	9	11	21	3				
			100	36.0	26.3	26.3	7.0	0.9	0	3.5	100	13.5	5.8	17.3	19.2	15.4	25.0	3.8	100	23.2	14.7	15.8	9.5	11.6	22.1	3.2				
高校一年	男	70	86	17	19	24	20	2	1	3	48	15	3	1	2	12	11	4	79	10	22	13	6	16	9	3				
			100	19.9	22.1	28.1	23.0	2.3	1.1	3.5	100	31.2	6.2	2.1	4.2	25.0	23.0	8.3	100	12.6	27.9	16.4	7.6	20.3	11.4	3.8				
	女	79	101	38	23	23	8	5	2	2	56	9	3	2	17	9	13	3	103	22	27	11	7	14	18	4				
			100	37.0	23.0	23.0	8.0	5.0	2.0	2.0	100	16.1	5.4	3.5	30.4	16.1	23.1	5.4	100	21.0	26.0	11.0	7.0	13.4	17.6	4.0				

1) 依田 新、内界の探究と悩み、青年心理学講座3, 1959p3

視させることになっているようである。

勉強が入試制度にたえず関連をもってくるようになると、そこに示される数量的取扱いに敏感になり、できるだけ自分の能力の否定まではいかず、他のあるいは周囲の条件をととのえることで自分の「数量化できる能力」を高めることに悩みを存在させてくる。

相対的自分の能力、それもすべて数量化を通すような勉強への悩みは、人間科学的数量化がおしすすめられれば別であるが、入試制度が現状のままで進められるとすれば、相対的悩みとして、勉強そのものへは正対せず、「見られる自己」への適応として受けとられこの受けとられかたが中心的位置をしめるようになるだろう。これら相対的關係に自分をおくこともある場合には必要なことかも知れないが自己を高めること、これらは悩みとたえず同次元に位置するものと考えられる。この高めかたに、自己の能力や識見や人格においてより高い位地をしめる。このためには他よりも多くの努力や修養をつみ重ねなければならぬ。もう一つは自分はそのままで他位地を引ずりおろせば相対的には自己の地位が上ることになる、そのために中傷とか悪口という形で他の人格を傷つけ欠点をさがし出す努力をすればよい。

日本の生活習慣の中には、後者にあたるような局面根性があり、その病害が近年の高校生の日々の現象に現われている面はないにしても、さぐり合いは存在している。

又この相対的生活態度(習慣)の現象が青年期の本質である悩みの世界へ、あるいは自己をみつめる機会をなくしつゝあることも認めなければならないのではないか、たえずどこかに依存している存在、心理的離乳のおこなわれない、幼見的青年期をすごしている高校生はないだろうか。学校教育から学校外の知識教育(とくに予備校、家庭教師、それにマスコミの学習プロなど)は彼らを依存的な立場にこそおくことはあっても、主体的にそして自己への投射を可能にする条件が以前と同じではないであろう。封建的な生活からは自主性は生れてこない、この表面的制度の飛躍もかかわらず、現存する青年期の一つの姿はそのまますごすにはあまりにもことなかれ主義に徹していると考えなければならない。とくに男子において個性発現の場としてクラブ活動と勉強の係に高い%をしめしていることにも注目しなければならない。クラブ活動が教育の目標である人間形成には有効な場であると考えられ、又そのおこない方は理想的に計画されるようである。(運動クラブについてはまだ問題がのこされているし、性別による取扱いにも問題点は残されているが)これを受けとめる学習者の側で理想と現実を同一場面で経験させる。勉強との相対的現実については統一の見解が保たれながら、クラブ活動については価値感と現実のおこないには指導者の間でも同一見解に立つことがむずかしい。クラブ活動の成果も現実には大学の口から発せられればその意義もみとめられ、入試に失敗した人の口からのクラブ活動の意義は無視されがちである。クラブ活動が問題児(学校では成績不振者をこのようによぶ場合がある)の活動の場におきかえられている面、などこのうけとめかたにもっと指導者側の直視を迫られているようである。

表1Bの健康容姿に関しては、体格、健康など男子に高い%をしめしているのに対し女子には容姿、運動神経など表面的なことが多い点、青年期の一般的現象もさることながら意識としての女性と実存の女性の差異、および人間像の一面がうかがえる。

表1Cの自分の性質に関しては、とくに女子において劣等感と自分を関連づけているようである。とくにBでもとらえたように表面的、数量的面に自己の認識の出発(青年前期)がある場合、対比現象は当然のことだろう。社交性

- 1) 入試制度に関してはその病害がいろいろ審議され、入試とその後の学習生活との関連などの調査もある。これら病害に対して37年10月の新聞にはこれを積極的に改善する意図が発表されている。
- 2) 鈴木清、教師への反抗と崇拜、青年心理学講座3、1959p53。
- 3) 欲求との関連のみでなく、個性の発現として真実にとっくんているものは対象外である。運動クラブではクラブの持ち方、個人の疎外の条件など、学校のクラブはまだまだ整備されなければならない多くの問題点をもっている。
- 4) ⑦ 横山 一郎 体育的活動の実際場面における男女差の実証的研究 奈良女子大文学部付属中、高研究紀要3集1960
① 藤野 健次郎 運動における性差体育心理、1962、pp141~149錦正社
② 原 芳男 教育的人間関係における年齢と性、教育社会学研究、1962、pp50~55
- 5) 横山 一郎 体育的活動を通して大人の提示する人間像における男女差の一考察、体育と小集団研究会1集1961

に乏しいなど「他からみた自分」と「自己からみた自分」の分裂の時期などがこれらの発生要因の一つとみなされるであろう。

表2. 悩みの実態 その2

項目 内容 N ₁ N ₂ 性別 学年	D. 家庭に関して										E. 学校生活に関して										F. 友人関係に関して									
	その他										その他										その他									
	N ₁										N ₁										N ₁									
	家庭の争い	両親の無理解	父又は母がいない	兄弟姉妹がいない	家計が苦しい	家族に病人がい	その他	その他	人間関係がこ	教師がえこひい	きつすぎる	予備校化してい	一部の生徒が能力	施設用具の不備	その他	人から信頼され	友人に裏切られ	異性の友人が欲しい	異性の友人が欲しい	異性の友人が欲しい	異性の友人が欲しい	異性の友人が欲しい	異性の友人が欲しい	異性の友人が欲しい	異性の友人が欲しい	異性の友人が欲しい	異性の友人が欲しい	異性の友人が欲しい	異性の友人が欲しい	異性の友人が欲しい
中学一・二年	34	10	9	1	5	1	3	5	62	12	15	0	11	16	4	76	36	3	15	21	7	2	2	2	2	2	2	2	2	2
男	100	29.4	26.5	2.9	14.5	2.9	8.8	14.5	100	19.4	24.2	0	17.7	25.8	6.5	100	47.4	3.9	19.7	27.6	9.2	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6
女	30	3	10	3	4	1	1	8	61	10	10	4	8	22	3	69	18	7	17	18	3	2	1	1	1	1	1	1	1	1
	100	10.0	33.3	10.0	13.3	3.3	3.3	26.8	100	16.4	16.4	6.6	13.1	36.1	4.9	100	26.1	10.1	24.6	26.1	4.3	2.9	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
高校一年	21	7	5	3	2	0	1	3	61	29	3	2	14	1	10	58	20	2	17	8	3	7	1	1	1	1	1	1	1	1
男	100	33.2	23.9	14.3	9.5	0	4.8	14.3	100	47.5	4.9	3.3	23.0	1.6	16.4	100	34.5	3.4	29.3	13.8	5.4	12.0	1.6	1.6	1.6	1.6	1.6	1.6	1.6	1.6
女	44	6	9	4	12	5	2	6	74	37	2	3	20	5	3	64	21	6	15	6	7	7	2	2	2	2	2	2	2	2
	100	13.6	20.5	9.1	27.3	11.3	4.6	13.6	100	50.2	2.8	4.2	26.2	6.9	4.2	100	32.8	9.4	23.5	9.4	10.9	10.9	3.1	3.1	3.1	3.1	3.1	3.1	3.1	3.1

家庭に関しては悩みの中では両親の無理解、家庭の争いなどが高い%をしめしている。これらは戦後の家族制度に対する根本的な変革が関連していると思われる。

社会的伝統によって培われた家本位、家長中心の考え方は国民的感情として根強く残っていると思われる。新しい時代の思想によって育てられた児童との間に多くの緊張と葛藤とを発生させていると考えられる。これらは日本の家族制度的特質から発生したものと、青年の成長、発達に伴って発生する家族間の人間関係の緊張があることは言うまでもない。家庭の争いの中で、自分と家族の争いの他に、父兄と母親の争いをあげているものがあつた点、意識としての女性の位置と現実の社会機構の中での位置の違いが彼らに悩みの材料になっていることをみのがすことができない。

学校生活に関して（調査が高校生については調査対象が高1なので、今からの変化をむしろ問題にすべきだろうが）、「人間的教師がいない」、「学校が予備校化している」の二つの%がかなりたかい。勿論高1の経験の少なからざるものもいくらかあるだろうが、付属中学からその大半が入学している点などから、やはりこの見方が時間を経るにしたがってそれほど変わっていくとは考えられないのではないだろうか（とくに高等学校においては全般的傾向の一つでもあるから）。

教師が「大人への反抗」の対象の一部となしていることは言うまでもない、それまで彼らの側で絶対視されていたものが、相対的に地位が下り、その中に批判が加わるようになる。教師への尊敬や信頼は一般的には青年期になるにしたがって低下していくのが普通だといわれる。又質的な面で、中学生では先生のやり方に批判したりすることが多いが高校になると「教師そのもののあり方」を考えたり、「そのあるべき姿」から「理想」「内面的人格的な不満」が主になってくる。いわゆる小学校時代の師弟関係の保護依存関係から、信頼関係が複雑になり、「信頼する教師」、「反抗する教師」と分化が行われるようになる。そして教師に対して個人差（家庭への依存度、心理的離乳など）が生じてくる。又この時期の批判が自発的使用の原理（Principle of Spontaneous）に依るとする説にも耳をかたむける必要があろう。

- 1) 鈴木 清、教師への反抗と崇拜、青年心理学講座3、1959p38.
- 2) ジャーナルによると人は発達しつつあるものを自ら積極的に使用しようとする傾向をもつといわれている。

これらの現象は自分と他の距離の認識からおこるものであり、教師が青年前期の反抗対象にして好都合であるということを知った上で彼らに接する必要がある。意見についての教師と生徒の側で割合に意見の対立がみられないのは位地が近くないために、権威が前にでてくるため意見の対立はあまりおこらないといわれているが、教師の側からも自分の主観の思う通りになる生徒をもっと多面視する必要がある。教師の権威性を否定しただけは反面、教師をより人間的に認識しようとするものとならなければならない。又この時期に安定への要求もその発達特性から高いことも留意する必要がある。反抗の裏には安定の欲求が一体となしている場合があるようにみられるから、この点に関して一般には快楽への逃避、集団への逃避、感情的解決、理論的解決におこるのであるが、高校生の場合、これに理論的根拠をもたせて解決しようとする。その結果、真にたよるべきものを教師の中にみ出すと、献身的な尊敬の念をささげる、これらは「人間的教師への要求」という形をとることになるだろう。

人間的教師とはどのようなものをさすか、いろいろな調査がおこなわれているが、それらの中に共通にあることは、「理解がある」「よく教える」「ひいきしない」「生徒と一緒に行動する」などで、人間的要求が高くなるのがこれらの資料から説明できる。

これを指導する中で生かすとしたら、「青年への理解から出発しなければならない」²⁾だろう。青年期の反抗や虚勢や粗暴が、ある程度まで青年期の特性であり(勿論、社会的不適応行動とは区別されなければならない)指導者が過去の経験にだけたよるような指導に立脚したならば、たとえば「時代の差と認めない」³⁾、「今日の日本のおかれているほどその差のいちじるしいことはないだろう」⁴⁾、「個人差のあることを認めない」又「自分の過去が美化されがちであることを認めず、都合のよいことばかり前面に出す」などはこれら理解のときは障害になる。科学的立場からの正しい理解が要求されてくるのである。

友人関係に関しての内容では、「心から信頼する友人が得られない」「異性の友人が欲しいが勇気がない」にかなり高い割合がしめされている、これが心理的発達上の特性としてこのような理由のあげられているのか、それともそれらとも関連をもつが、心理的要因以上に社会的要因によってこのような条件が存存させられているとすれば、それらの因子究明には多面的な配慮が要求されるであろう。友人、その中で親友のあり方についてもいろいろな考え方がのべられている。協力関係が全てであり、その中に一次的に競争的感情場面があったにしても、それは協力の中に包括されるとするもの⁵⁾、現在の親友関係は協力と競争を同意味において備えているものであり、そのバランスのとり方が親友関係を支えるとするもの⁶⁾、その中の情緒的関係について結びつきの要因の具体的結びつきから親友を規定しているもの⁷⁾、などと見えかたによっても勿論多岐にわたることはいうまでもないが、これらは規定のしかたに慎重さが要求されることを裏がきしているようである。

自己の慰めの理解者としての日記から、友人への心理的、社会的移行、これらはいわゆる自分の心をうちあけることのできる人、自分のいうことを聞いてくれる人、自分褒賞してくれる人、学校や生活についてのミ力的な話しをする人、自分を慰めてくれる人を欲しているのである。

今まで(発達の)家庭や学校などのことは無批判に受けとられたのに、これらに価値的欲求の高まりから不信や、反抗が生れてくる、そしてこれらの相談相手としての友人を求めることになる、これら友人の一般的条件では相対的意味より自分を受け入れることに重点的意味をおいていたと受けとっているのではない、というが現実には相対的条件およびその意味がより現実をおびた社会的価値に直結するとすると既述の必要条件だけではみだされ、自

る、これを自発的使用の原理とよんだ、発達に伴って内的 motivation がおこりそれによりその機能や特性が使用され練習される。

- 1) 鈴木 清 教師への反抗と崇拜
中森 孔郎 教師の条件、現代教育学18巻p166〜ウィラード・ワラー石山修平訳、学校集団p310〜など
- 2) 鈴木 清 教師への反抗と崇拜p73〜76
- 3) 波多野完治 人間の成長と学習、現代教育学2巻pp3〜4などがこれらに対する重要な取扱方をしている。
- 4) 田中熊次郎 社会的適応と友人関係、人間関係の診断、pp.169〜170.1961
その他友人関係を発達との関連で縦断的に考察したものの中にはこの特性に対して考察が行われているし、それらは全て自我との関連で説明づけられている。
- 5) 石崎恒次郎 現代教育社会学1956pp138〜140
- 6) 広岡 亮蔵 9月22日N.H.K.T.Vの「親友について」
- 7) 古旗 安好 学友関係的要因、教育心理第14巻1959pp26〜28

分と友人の係にバランスの測り方を必要とすることがおこってくる。親友における知能年齢、興味の対象、家庭の社会的経済的地位はかなり高い相関がみられると云われている。とくに精神的発達¹⁾の程度が同じであることが青年期の友人関係には要求されるようである。(勿論、類似性は必ずしも必要な条件ではない場合がある)

「異性の友人が欲しいが勇気がない」というのにかなり高い%がしめられている、中学の「異性との交際は誤解され干渉される」からの数量的な面での脱皮はあっても、異性との友人関係にはたえず現在の社会意識と直結するだけに悩みの生じる原因になりやすいと考えられる、とくに内部からは第二次性徴期の特性的欲求と周囲の矛盾に直面させられる面であろう。「勇気がない」と云う語を個人の立場の問題として把握してくる場合、性格上の問題よりも異性への友人関係の求め方における意識の基盤の軟弱さに起因している場合が応々にみられる。

又社会的な条件が、いわゆる生活様式からくる習慣的圧迫は、封建下においては、女子は人間としての価値がみとめられる機会がなく、女子は好奇心の対象としての存在としかうけとられなく、それらの関係は人間的存在とは考えられなかった、自分達の行動の出発には価値を存在させ、それが、価値を否定した周囲の圧迫との間には相当の勇気が必要とされるであろう。勇気にはこのような両者の意味を含んで、関係を生じさせる障害の一つとなっている。友人、親友がないのでさびしいといったえているものがあるが、これらの説明は以上のようなもろもろの因子との関係から生じていると考えられる。

表3 悩みの実態 その3

項目 内 容 N %			G. 人生社会に関して								H 余暇利用に関して											
			N ₁	将来に希望がな	いかに生きたい	幸福とは何か	社会が矛盾にみ	何のために学問	大人を信頼でき	その他	N ₁	いかに余暇がなくなる	読書の時間がない	スポーツに趣味	ゲームに趣味	いかに遊びがわ	いかに遊びがわ	いかに遊びがわ	いかに遊びがわ	いかに遊びがわ	その他	その他
学年	性別		78	12	18	7	18	11	10	2	65	13	18	6	5	12	6	3	6			
中学・二年	男	102	100	15.4	23.1	9.0	23.1	14.1	12.8	2.6	100	20.0	27.7	9.2	7.7	18.5	9.2	4.6				
	女	93	67	9	16	8	10	10	13	1	37	9	6	5	5	4	7	1	6			
			100	13.4	23.9	11.9	14.9	14.9	19.4	1.5	100	24.3	16.2	13.5	13.5	10.8	18.9	2.7				
高校一年	男	70	71	11	16	11	20	3	6	4	39	18	6	1	2	2	8	2				
	女	79	87	11	11	11	25	18	1	1	51	20	1	4	4	4	14	4				
			100	14.1	14.1	14.1	32.1	23.1	1.3	1.3	100	39.1	1.8	7.8	7.8	7.8	27.5	7.8				

人生、社会に関する悩みの中で、「社会が矛盾にみちている」とこたえたものと、「人生はいかに生くべきかわからない」というのが高い%をしめしている、又女子で「何のために学問するのかわからない」に相当高率解答をしているようである。青年期に社会の矛盾を感じることは理想と現実の距離がある以上おこることだろうが、近年の家族関係や生活習慣の違いはよけいにこれらの点に対する悩みを生じさせているようである。女子の「何のために学問をするのかわからない」にかなり高い%があることについて、男子では中学時代の後期にこのような悩みをもつものが多くなってくるようである。この説明が自分の学問の認識か、他の人のための学問か²⁾認識によっても変わってくるだろう。女子の場合には学問の結果と女子の生活像とが直結しにくい現実や学校の制度が、そして学問と学校の勉強とだけの限定をした考えかたの中には、大学へはいるための勉強、就職のための勉強、それらがあまりにもはっきりした自己利害にむすびつくだけに理想を価値の最高峰においているこの年代には悩みの内容となるのであろう。

1) ・石崎恒次郎 現代教育社会学1956, pp137~138

・依田 新 内界の探究と悩み、青年心理学講座1959p.20など。

2) 野田 一夫 婦人公論(3月号)1963で女子学生亡国論に関して文学部や家政学部のあり方に一つの提案を試みている。

余暇の利用に関しても、「いろいろなことに気が散る」、「勉強におわれて時間がない」などにかなり高い%がみられる。とくにやりたいことが思うようにできない場合、精神衛生の条件として悪い条件へおいこむことになるし、いろいろな現象をおこしているのであろう。文化の発達が「気を散らす」条件を多く生産していることも一因であろう。目標と努力の相関度が簡単なものではないだろうし、青年期の目標が大きくなればそれだけ成就感とは遠ざけ、気を散らすか、気が散っているように自己をみつめることを生じせしめるのだろう。勉強におわれて時間がないと云うのは近年小学校から増加している内容である、学習内容が豊富になったこともあるだろうが、現在の進学、就職の圧迫感がこれらの因子を表出させていると考えるのは一般的である。

このように個々の悩みの内容にはそれぞれの関連する原因があり、青年の時代にはいつもあるであろうと考えられる悩み、世代の変化がよけいにそれらを生じせしめていると思われるもの、人為的に悩みを生じさせていると考えられるもの、など、悩みの分析も縦断面的考察が必要である。

表4 悩みの分布および他校との比較

中高別	学校別	性別	内 容 N %	記 号										N ₁
				A	B	C	D	E	F	G	H	I		
				勉強に 関して	健康容姿に 関し	自分の性質に 関	家庭に 関して	学校生活に 関し	友人関係に 関し	人生社会に 関し	余暇利用に 関し	そ の 他		
中 学	本 校	男	102	119	50	94	34	62	76	78	65	6	584	
			100	20.4	10.3	16.1	5.8	10.6	13.0	13.4	11.3	1.1		
		女	93	114	52	95	30	61	69	67	37	6	531	
			100	21.5	9.8	17.9	5.6	11.5	13.0	12.6	7.0	1.1		
	東 京	男	50	152	37	85	25	31	42	18	13		403	
			100	37.7	9.2	21.1	6.2	7.7	10.4	4.5	3.2			
		女	50	215	30	96	22	24	33	28	5		453	
			100	47.5	6.6	21.2	4.9	5.3	7.3	6.2	1.1			
	神 奈 川	男	50	77	23	54	17	25	45	10	10		261	
			100	29.5	8.8	20.7	6.5	9.6	17.2	3.8	3.8			
		女	50	92	32	57	15	20	30	13	11		270	
			100	34.1	11.9	21.1	5.6	7.4	11.1	4.8	4.1			
	埼 玉	男	53	184	63	84	27	37	49	9	4		457	
			100	40.3	13.8	18.4	5.9	8.1	10.7	2.0	0.9			
		女	72	197	61	108	26	35	34	8	14		483	
			100	40.8	12.6	22.4	5.4	7.2	7.0	1.7	2.9			
高 校	本 校	男	70	86	48	79	21	61	58	81	39	3	476	
			100	18.1	10.1	16.6	4.4	12.8	12.2	17.0	8.2	0.6		
		女	79	101	56	103	44	74	64	78	51	71	576	
			100	17.4	9.7	17.4	7.6	12.8	11.1	14.5	8.8	0.1		
	大 全 日 阪 制	男	1228											
			100	13.2	7.1	14.1	6.3	10.4	10.5	15.5	6.7	0.8		
		女	405											
			100	12.8	7.4	15.0	7.5	6.3	10.6	18.1	8.0	1.6		
	東 付 大 属	男	336											
			100	30.3	10.0	14.9	6.6	10.3	10.4	7.1				
		女												

表5 本校生の悩みの順位（5位まで）及び%

中高 性別	順位	1	2	3	4	5
		勉強	性質	人生社会	友人	余暇
中学	男	20.4	16.1	13.4	13.0	11.3
	女	21.5	17.9	13.0	12.6	11.5
高校	男	18.1	17.0	16.6	12.8	12.2
	女	17.4	17.4	14.5	12.8	11.1

この位置の変化がおこっていることに注目したい。

これらの順位の中で悩みの対象としての友人関係の位置は5位である。内容としての友人関係についてはその解決場面としての友人関係の位置との関連においてみなければならないだろう。

表6 悩みの相談者

記号	性別	番号 N ₁ %	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
			H・Rの先生	生活課の先生	1生・2以外の先生	小・中・高時代の先生	父	母	兄弟姉妹	友人	その他	だれにも相談しない
A 勉強	男	62 100.0	4 6.4	0 0	1 1.6	3 4.8	1 1.6	5 8.1	4 6.4	9 14.5	1 1.6	34 55.0
	女	88 100.0	8 9.1	0 0	3 3.5	3 3.5	3 3.5	11 12.5	11 12.5	25 28.3	4 4.5	20 22.6
B 健康容姿	男	32 100.0	0 0	0 0	2 6.3	0 0	1 3.1	12 37.5	3 9.3	2 6.3	1 3.1	11 34.4
	女	57 100.0	0 0	0 0	0 0	1 1.7	1 1.7	17 29.9	5 8.8	8 14.1	0 0	25 43.8
C 性質	男	51 100.0	0 0	0 0	0 0	1 2.0	1 2.0	3 5.9	1 2.0	7 13.7	2 3.9	36 70.5
	女	81 100.0	4 4.9	0 0	2 2.5	4 4.9	1 1.2	16 19.8	4 4.9	16 19.8	2 2.5	32 39.5
D 家庭	男	26 100.0	1 3.8	0 0	0 0	0 0	1 3.8	2 7.8	1 3.8	0 0	1 3.8	20 77.0
	女	40 100.0	0 0	0 0	2 5.0	0 0	2 5.0	8 20.0	2 5.0	10 25.0	0 0	16 40.0
E 学	男	54 100.0	1 1.8	0 0	1 1.8	2 3.7	2 3.7	0 0	1 1.8	11 20.4	2 3.7	34 63.1

表4は本校の悩みと他校との比較である。

「勉強に関する悩み」の%は他校にくらべると少いのは、現在の選抜方法に起因しているのかもしれない、又調査対象の選び方にも問題が含まれていることも反省しなければならない。

「学校生活に関する悩み」、「友人関係に関する悩み」、「人生社会に関する悩み」など他校よりやや多いようである。

学校生活に関するものには教師集団の協力によって解決できる面が多いようであるし、真の悩みを存在させることは必要なことであるが、悩みの与え方、うけとめ方にもっと研究を必要とするのではないだろうか。

表5は本校生の悩みを5位まで順序づけたものである、高校においては男女差がみられるし、又中高の間に

表6から勉強についてはH・Rの先生が悩みの相談者は若干あげられているが、それ以外の内容についてはほとんど相談相手にはなっていない、（性質について女子が4.9%、人生社会について女子が4.3%などあるが……）。

生活課の先生についてはどの項目についても皆無である。これらは生活課（生活指導）がその移行において補導訓育との関連を残存させたこと、および、現在の生活指導の無目的さがこのような残影を生徒の中に存在させていること、いいかえれば生活指導の積極的働きかけの場は受験体制の中ではうばわれてしまい、その存在さえ必要でないようにとられやすい、しかし一たん事件や事故がおこると残影を表面に引き出した生活課への期待がなされるのではないだろうか。本校の生活課では、これらに対し生徒に罰則の対象としての生活課からの脱皮をめざし、生徒のはいりよい環境の工夫、あるいは個別のカンセリングルームを作りあげ、生活課本来の姿へ脱皮すべく努力をかさねているが、なかなか困難でもある。しかしこれらは生活課の内部的努力と合せて学校組織の上での生活課や生活指導に対する共通理解が保たれなければ生徒の側へはギャップとしての作用はあるにしても有効な働きかけはあまり期待できないであろう。国立教育研究所の調査によれば、「生徒

校生活	女	56	0	0	1	0	0	4	3	16	2	30
		100.0	0	0	1.9	0	0	7.1	5.3	28.6	3.6	53.5
F 友人関係	男	44	1	0	0	0	0	0	2	8	2	31
		100.0	2.3	0	0	0	0	0	4.5	18.2	4.5	70.5
	女	56	1	0	3	0	0	10	1	12	1	28
		100.0	1.8	0	5.3	0	0	17.9	1.8	21.4	1.8	50.0
G 人生社会	男	53	0	0	1	1	5	3	2	11	4	26
		100.0	0	0	1.9	1.9	9.4	5.7	3.8	20.7	7.6	49.0
	女	70	3	0	1	1	4	15	2	16	3	25
		100.0	4.3	0	1.4	1.4	5.7	21.4	2.9	22.8	4.3	35.8
H 余暇利用	男	31	0	0	0	1	1	1	2	7	1	18
		100.0	0	0	0	3.2	3.2	3.2	6.5	22.6	3.2	58.1
	女	46	0	0	0	1	1	4	4	13	0	23
		100.0	0	0	0	2.2	2.2	8.7	8.7	28.2	0	50.0
全	男	353	7	0	5	8	12	26	16	55	14	210
		100.0	2.0	0	1.4	2.3	3.4	7.4	4.5	15.6	4.0	59.4
	女	510	16	0	12	10	12	85	32	132	12	199
		100.0	3.0	0	2.4	1.9	2.4	16.8	6.3	25.8	2.4	39.0

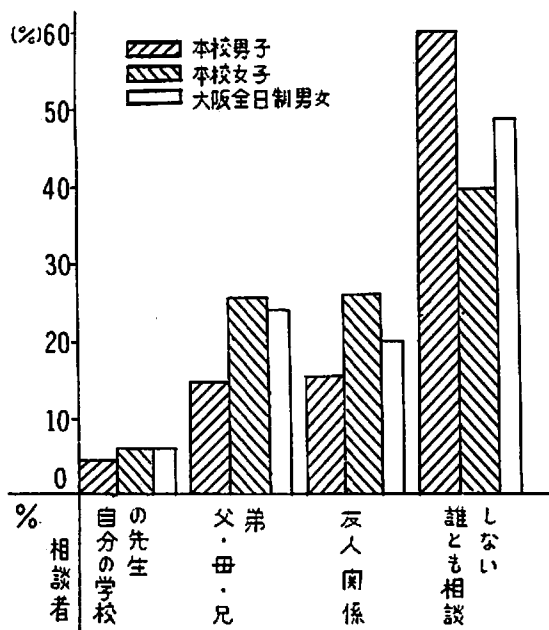
に勉強さえておけばよい」そうすれば生活指導の問題は全て解決すると云う考え方が全国の高校の半数あると説明されている、これらは現在の入試関係と生活指導のあり方との関連で複雑さを含んでいることを説明している。学校の先生関係への相談に比べて、家庭における相談の対象は多いようである。又それらは項目によって違うことも大きな特徴として受けとられるだろう。男女ともに健康容姿に関し母親に相談する%が高いようである。性格、家庭、友人のことに關しての母親の精神衛生的価値は大きいと云わなければならない。そしてこれらは日本の家族制度の中における位地、および青年期の權威に対する反抗と関係があるとみななければならないだろう。女子教育の高よりはこれらの価値をさらに高めてくれることを期待できるであろう。近代社会の発達に過去にくらべれば家族集団から多くの機能をうばったと云われている、しかし家族員相互の異質性はますます大きくなっても、人間生活においてはそ

の結合が強くなり、家族集団の意義はますます大きくなるといわれる。そして相談者としての母親が多く信頼を得ていることは多くの研究にみられる、その研究では男子において「母を好きだ」とするものの間には差がなく、女子は母を優位におくものが64.9%あるとしている、男女を通じても56.7%で母がすかされている、又「どちらがえらいか」との問いには父だと答えるものが多く、「どちらがありがたいか」との問いには母親をあげていると説明されている。これらの事情が悩みの相談者としての位地すけをするものとみられる。しかしこれらの位地を友人関係の位地の移行により、とくに青年期にはこの家族の悩みの相談者としての位地も変化してくると思われる。友人が相談者にして有効な指数にあることは表6によっても明かである。家庭の問題や学校のとくに先生や、学校のあり方に関する問題、人生社会に關することには有効なのであろう。互いに独立した人格者として、自主的に交際できるこの条件は重要な人間形成の条件であらう、「だれにも相談しない」の%が高いことも今までの相談者の実情と関連をもちながら注目しなければならない点である。男子において「自分の性質に関しては男子で70%強、家庭に關しても男子は7%、学校生活では63.1%友人関係では男女ともに50~70%、とかなり高い率を示している。これらの原因と結果の考案には多くの点からの究明を必要とされる、原因についても、理想と現実とその距離感がなくなったのか、それとも距離感の認識はあっても、解決をしたいと思わないのか、とくに後者の条件は何か、もっと明らかにする必要がある。自分の性質について、⁵⁾もともと人間関係においては気質まで通じあう友人関係の獲得がむずかしいことを感じられる。学校における孤立現象も、これら誰にも相談しないと云う%を高めていることになろう。

又これを「悩みが存在しないからではないか、悩みを意図的に与える必要があるのではないか」という意見もあることにも留意する必要があるが、先ほどのべた距離感の認識がなくなったのだとしたら、青年期を幼兒的過し方をした成人の社会的不適応を考えないでいいのであろうか、情緒的結びつきの観察さがなくても、自分の比較的内的的なことまでさらけ出しつゝある現代の特性（私的なことを他人の前にさらけ出すものではないといった社会通念が現

- 1) 大西誠一郎、家族間の緊張 青年心理学講座3 1959, pp87~88
- 2) 大西誠一郎は、辻正三、児童を通じてみた家庭の力動的構造に関する研究、1952pp12~21。教師養成研究会青年心理学、1953, pp145~146などをあげ説明している。
- 3) 大西誠一郎 親子間の緊張と葛藤 青年心理学1959, p103, pp106~109
- 4) 青井 和夫 小集団の構造と機能、今日の社会心理学1962PP.33~34
- 5) 小川 利夫 青年の生活と問題、現代教育学第16巻P.39
- 6) 第2回高等学校研究大会において、本校生の悩みにおける学友関係の要因の一考察の発表（横山）に対し名古屋大学付高よりの質問

グラフ1. 悩みの相談者の比較



子では中学1・2年と中学3年以上との間に明らかに差異がみとめられるという。これらを本校の実態把握の視点の一つにしてみたい。

② 友人関係の実態

現在同じ学年に友人があるか、ないか、について調査したものが表7である。高1、97%から高3の96%まで男子より女子の方が友人のいると答えている者の数は多いが、何らかの結びつきをもった友人が存在していることをしめている。

友人関係の生じる原因は発達段階によって違うようである。次に情緒的結びつきを考察してみると表8のようである。高1と高2・3との間に男女ともに大きな広がりがあるようである。これは1年の機会の未熟さ、高2の中堅的活動さ、高3の精神的安定さなどの影響も一部はあるだろう。親友、知人、場の共有者などの概念規定には、親友として、「自分の悩み、ほんとうに理解し、ともに悲しみ、ともに喜んでくれるし、お互いを本当に信頼しあっている、いわゆる親友の間柄である」、知人として「一緒に学校にきたり、休み時間に一緒にスポーツをしたりするが、内面的なことはお互い全然ふれない、この間も私が困ったときに助けてくれなかったが私もそんなことはあまり気にしていない、学校で、一緒に行動することは多い」、場の共有者として「クラスや学年が一緒だから会ったら話しはするが、自分の方から積極的に話しかけない、勉強でわからないときなどたまにきくことはある。まあ同じクラス(学年)という以外特別親しみはない」という規定を一応もうけた。男子の方は選択条件がきびしいとみえて親友の%は女子に比べて低い、その他の内容として親友と知人の中間的關係というのが多い。これはこちらの択一式をとったので、このようなその他があらわれたと思われる、なお親友と知人をもちあわせているものは親友だけをあげたのでこれ以上に情緒的結びつきの薄い層の%は高まると考えられる。親友が50%近くあり(とくに女子には80%近くあるが)悩みの相談者としての位地はある程度保たれていると考えていいであろう。とくにこの学校では親友の条件となる知能指数や経済的条件、それに精神的発達についてもある程度の共通性をもちあわせている。とくに知能指数など全体に高い。グラフ3は親友の人数をあらわしたものである。今まで人数は2人から3人と云われていたのも大

在では欲求、私的考え方に変化がおこっていること、学校においても正しい人間関係の促進の営みの効果は、先生に自分のことを平気で大声で話しをするといった風潮、とくに異性の友人のことでそれを表面化した会話の機会にのせるものが多いが……など)との関連でもながめる必要であろう。しかし悩みを持ち、それが内部で不適応現象の条件になりやすいものを含んでいるとしたら高校教育の大きな問題点だろう。

悩みの内容における友人関係的もの、相談者としての友人関係の意義は非常に大きいといわなければならない。

又教育的意義についても多くの研究がある、青年発達において、近代社会の人間の理想的な社会形成と現在の社会要求との交差場面として経験することは大切なことである、

その他もろもろの有効な指数をもち合せている。

友人関係の中で親友の影響はその性格形成にある意味で重要な働きがあるようである。

そしてその親友関係の人数が2〜4名内外のもので、これ以上拡大することがその結合の条件がわるくなると云われる、又男子では中学と高校との間に、女

① 石崎恒次郎 現代教育社会学 1956, pp146~157

② 望月 衛 青年心理学 1951pp72~73

表7. 同学年に友人があるか

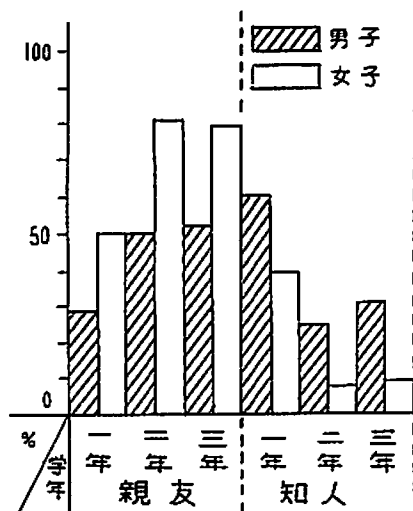
性別	学年	内容		ある	ない	無不 証明
		人数	N _i %			
男子	1	69	67	2	0	
		100	97.0	3.0	0	
	2	65	60	5	0	
		100	92.0	8.0	0	
	3	59	55	4	0	
女子	1	76	75	1	0	
		100	98.7	1.3	0	
	2	73	71	2	0	
		100	97.6	2.4	0	
	3	78	77	1	0	
男女	1	100	97.0	3.0	0	
男女	2	100	97.0	3.0	0	
男女	3	100	96.0	4.0	0	
合計		420	405	15	0	
		100	97.0	3.0	0	

表8. 友人関係の内容

性別	学年	N _i %	内容				
			親友	知人	場共有者	その他	無不証明
男子	1	67	19	40	4	3	1
		100.0	28.0	60.0	6.0	4.0	2.0
	2	60	30	16	4	9	1
		100.0	50.0	26.6	6.7	15.0	1.7
	3	55	29	18	4	2	2
女子	1	75	38	29	0	6	2
		100.0	50.7	38.6	0	8.0	2.7
	2	71	58	5	0	8	0
		100.0	82.0	7.0	0	11.0	0
	3	77	60	7	1	6	3
男女	1	142	57	69	4	9	3
		100.0	40.2	48.6	2.8	6.3	2.1
	2	131	88	21	4	17	1
		100.0	67.0	16.0	3.2	17.0	0.8
	3	132	89	25	5	8	5
合計	1	403	234	115	13	34	9
		100.0	58.0	28.3	3.2	8.4	2.2

きな違いはないが4人にかんりの%が示されていることなど新しい意識の発現とみていい場面だろう。高2、高3の女子に4人グループが多いようである。5人グループについても高2は16.1%もあるが、小集団研究の定義や、その他の機能(「In interaction」)などの面からも6人以上の親友が不可能なことは説明がなされている。グラフ4と表9から情緒的結びつきの内容によって人数のワケが広がっていくことがうかがえる。これらの関係

グラフ2



グラフ3

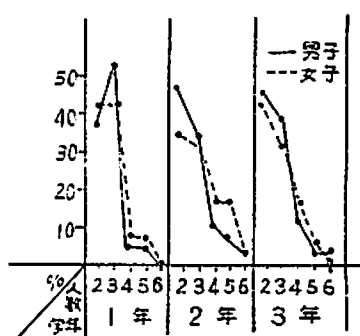


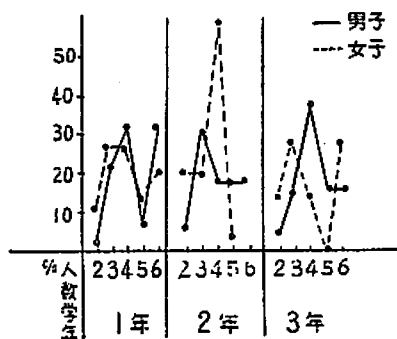
表8. 親友の人数

性別	学年	内容 N ₁ %	2 人	3 人	4 人	5 人	6 人以上	無記 不明
男子	1	19	7	10	1	1	0	0
		100	37.0	53.0	5.0	5.0	0	0
	2	30	14	10	3	2	1	0
		100	46.5	33.5	10.0	6.7	3.3	0
	3	29	13	11	3	1	1	0
		100	45.0	38.0	12.0	3.5	3.5	0
女子	1	38	16	16	3	3	0	0
		100	42.1	42.1	7.9	7.9	0	0
	2	56	19	17	9	9	2	2
		100	34.0	30.6	16.1	16.1	3.6	3.6
	3	60	29	18	10	3	0	0
		100	40.5	30.0	16.6	5.0	0	0
男女	1	100	40.5	45.5	7.0	7.0	0	0
男女	2	100	37.5	30.8	13.6	12.4	3.4	2.3
男女	3	100	47.4	32.8	14.7	4.6	0.5	0
合計		234	98	82	29	19	4	2
		100	42.5	35.0	12.4	8.0	1.7	0.9

表9. 知人の数について

性別	学年	内容 N ₁ %	2 人	3 人	4 人	5 人	6 人以上	無記 不明
男子	1	40	1	9	13	3	13	1
		100	2.5	22.5	32.5	7.5	32.5	2.5
	2	16	1	5	3	3	3	1
		100	6.3	31.3	18.7	18.7	18.7	6.3
	3	18	1	3	7	3	3	1
		100	5.5	16.7	38.9	16.7	16.7	5.5
女子	1	29	3	8	8	4	6	0
		100	10.2	27.6	27.6	13.8	20.7	0
	2	5	0	1	1	3	0	0
		100	0	20.0	20.0	60.0	0	0
	3	7	1	2	1	0	2	1
		100	14.3	28.6	14.3	0	28.6	14.2
男女	1	100	5.9	24.6	30.5	1.0	22.5	1.5
男女	2	100	4.8	28.6	19.0	28.6	14.3	4.8
男女	3	100	8.0	20.0	32.0	12.0	20.0	8.0
合計		115	7	28	33	16	27	4
		100	6.2	24.3	28.5	14.0	23.5	3.5

グラフ4 知人の人数



にとって個人が何らかの利害関係をもち得るのはやはり6~7名位である
と云う説明にも耳をかたむける必要があるだろう。(勿論 formal な
group と informal な group の中間的人数の規定は明確ではないが)。
表10は親友、知人の中に異性が人数としてどれ位含まれているかを調べ
たものである。男女両性の正しい理解と云う点に関しては共学制度は有
効であったようである。「好奇心よりも人間として尊重すること、社会
の中で両者の正しい協力関係が必要であること、現在と将来の男女の人間
像の認識の上に立ち、現在を正しく理解し能力の適正を考えてそれを
社会へ向けて貢献できるようにしていく」ことが、現在の高校生の意識
になりつゝあると考えてよいであろう。それらは統計的にも親友関係
の中にも異性を含んでいるという事実がその説明の一翼になることにな
るだろう。フオークゲンス、歌う会、それに教科学習における相互作用
は云うに及ばず、人間的接触をもっていることは正しい姿として指導
の上のせてやる必要があろう。正しい科学的理解は好奇心のはいる余

地を与えないだろうし、人間の正しい理解はやはり両性の協力を必要とすると考える。人間科学が成立するとすれば、ますますこの点は強調されるであろう。これは我々が、個人差や、性差の尺度と同一化したり、差異を優劣に結びつけたり、罪惡に結びつけたりすることへの一つの反省にしなければならないだろう。

表11は頻数は少ないのであるが、親友や知人がどの程度、自分の周囲との関連で、人間的確立がなされているかをみたものである。結果は移行期的結果としては好ましい状態と云えよう。37%強(頻数は少ないが)もある「あまり意識しない」「全然意識しない」は今後の指導の参考資料として生かしていけるようである。知人についても24.1%ある(頻度が少ないので統計的処理とそれの考察には相当慎重なとりあげたをしなければならぬが……)。

友人がない人に関する解答数は少ない(表7からわかるが……)ので内容を参考のために列挙してみたい。「友人が欲し

表10 親友、知人の中に異性が含まれるか

性別	年齢	N	親 友				知 人			
			N ₁ %	含まれて	含まれて	無記不明	N ₁ %	含まれて	含まれて	無記不明
男子	1	67	19	4	15	0	39	7	4	26
			100	21.0	79.0	0	100	18.0	10.1	66.9
	2	60	30	5	23	2	15	2	6	7
			100	16.7	76.7	16.6	100	13.3	40.0	46.7
	3	55	29	5	24	0	17	1	2	14
			100	17.2	82.8	0	100	5.8	11.8	82.4
女子	1	75	38	2	35	1	29	0	5	24
			100	5.3	92.1	2.6	100	0	17.2	82.8
	2	71	54	6	45	3	5	1	0	4
			100	11.1	83.0	5.9	100	20.0	0.8	0.0
	3	77	60	7	51	2	6	0	1	4
			100	11.6	85.0	3.4	100	0	16.7	66.7
男女	1	142	100	13.3	88.0	1.7	100	10.2	13.3	73.6
男女	2	131	100	12.8	79.5	7.7	100	15.0	30.0	55.0
男女	3	132	100	13.6	84.1	2.3	100	4.3	13.0	78.3
合計		403	232	29	193	10	111	11	18	80
			100	12.5	88.2	4.3	100	9.9	15.2	72.0

いか」の問に対し「欲しいときもある」に46.7% (N=7)「非常に欲しい」, 26.7% (N=4) などの内容をあらわしている。女子については「非常に欲しい」の内容が多い。友人の情緒的面对する期待については90.9% (N=10) が親友を求めている。友人の人数はどれ位がいいと思うかの問に対して, 54.5% (N=6) が2人, 27.3% (N=3) が3人をあげている, これは親友関係との関連でみるとらなずけるところである。親友の異性に関する問題については「どちらでもよい」というのが50.0% (N=5)「同性の方がよい」が30% (N=3)「異性の方がよい」が20% (N=2)といった内容になっている。

現在友人がなくて, これからも友人が必要でないと答えている者の理由は「他の連中も親友といっているが本当の親友なんてあるわけがない, お互いお世辞をいうより一人の方がよい」という懐疑的な内容である。

現在のこのような友人関係の実態に対し, これらがどこで, どのように営まれているのかと明かにし, 教育的営みとしての具体化をはかる必要が生じてくる。

表11 親友、知人における異性の存在について

分類 性別 年齢		親 友						知 人					
		N ₁ %	つねに 意識する	意識する こともある	あまり ない	全然 意識しない	無記不明	N ₁ %	同性の 場合と同じ	合同の 場合と同じ	違うこと もあるし	も ある	全然 違う
男 子	1	4	0	1	3	0	0	11	1	9	1	0	
		100	0.25	75.0	0	0	0	100	9.1	81.8	9.1	0	
	2	5	1	2	1	1	0	8	2	6	0	0	
		100	20.0	40.0	20.0	20.0	0	100	25.0	75.0	0	0	
	3	5	2	1	2	0	0	3	1	2	0	0	
		100	40.0	20.0	40.0	0	0	100	33.2	66.7	0	0	
女 子	1	2	0	1	1	0	0	5	2	3	0	0	
		100	0	50.0	50.0	0	0	100	40.0	60.0	0	0	
	2	6	0	5	1	0	0	1	1	0	0	0	
		100	0	83.3	16.7	0	0	100	100	0	0	0	
	3	7	1	2	3	1	0	1	0	1	0	0	
		100	14.3	28.6	42.8	14.3	0	100	0	100	0	0	
男女	1	6	0	3	3	0	0	16	18.8	75.0	6.2	0	
男女	2	11	9.1	63.6	18.2	9.1	0	100	33.3	66.7	0	0	
男女	3	12	25.0	25.0	41.7	9.3	0	100	25.0	75.0	0	0	
合計		29	4	12	11	2	0	29	7	21	1	0	
		100	13.4	41.4	37.9	6.9	0	100	24.1	72.4	3.5	0	

—(II)—

小学校, 中学校初期では学校内の条件より学校外の, 他律的(地理的条件など)なものに作用されやすいだろう。中学, 高校では友人関係の内容自体の複雑さ, 変化がそれらの条件以外に自律的というか, 自己の内面の接触を必要とさせるようになる, そしてそれらが学校のとくに年令的, その他の面で平等な条件に近いということが, 友人関係の有効な場であることが明かにされている。

Lewinの Group dynamic の理論や実験はこれらを集団との関連でとらえるべきことを教えてくれている, Psyche-group や Soico group の友人関係促進の実態やこれらに関係する諸因子の究明が学校教育の有効な場を知ると言う意味からも必要になってくる。

Psyche-group としてはここでは一応clubをとりあげ, Socio-group

としては Home-room を比較の便ぎ上からとりあげる。「これら group の規準を指導上の方法の基礎として使用せよ」という R.Schoring の言に耳をかたむけながら……。

表 8、9 と関連して集団場面への考察対象について若干基礎的資料としてあげたものが表 12, 13, 14 である。友人の数について 7 人以上というのに男子が多いことが特筆すべきことであろう。

これは表 8、9 の調査対象と違うためと、この学年のとき付属中学出身者については中学時代の group-work の意図的努力の結果とも受けとれる。(グループがきまりきっていて孤立者がでることがありその責任がグループづくりにあるようにとられている、孤立者をグループの内にいれる努力はあまりはられない) もし情緒的結びつきなどとの関連でも 7 人集団が存在するとすれば、又それらが好的指数を示すとすれば、これらのプログラムは指導に実験結果として生かせるであろう。

表12 親しい友人の数

性別	人数 N %		2 人	3 ~ 4 人	5 ~ 6 人	7 人 以上
男	68	100.0	13.2	26.5	25.0	35.3
女	71	100.0	5.6	40.8	33.8	19.8

表13 親しい友人の性別

性別	内容 N %		同性 だけ	同を 含む 異性	異性 だけ
男	68	100.0	97.0	3.0	0
女	71	100.0	85.9	14.1	0

表14 友人との話しの内容はどんなことか(主に)

性別	内 容 N ₁ %		趣味 について	異性 について	学習 について	学校 生活について	雑 談	友人 について	クラブ 活動について	政治 について	遊び について	何で も話合う	家庭 のこと	なやみ について	自己の 生活について	きまっ ていない	日常生活 のできごと	無 記 不 明
男	134	100.0	14.9	9.0	18.7	4.5	8.2	6.7	8.2	2.3	5.3	9.0	0	0	0.7	8.2	2.3	3.0
女	123	100.0	8.3	6.0	28.0	6.0	1.6	11.4	4.6	0.8	1.6	12.9	13.6	3.0	0	1.6	0.8	0

表15 親しくなった理由(%)

理由 分類		自 律 的 条 件										他 律 的 条 件										そ の 他											
内 容 性 別	N ₁	ク ラ ブ が 同 じ	気 が あ う	趣 味 が 同 じ	お も し ろ い か ら	尊 敬 し て い た か ら	友 達 の 友 達 だ か ら	自 分 か ら 友 達 に な っ て く る よ う な の ん だ	学 級 に 友 達 が な い の で	相 手 が 理 解 で き る	グ ル ー プ が 一 緒	N ₁	地 理 ・ 交 通 関 係	ク ラ ス が 一 緒 だ か ら	講 座 が 同 じ だ か ら	座 席 が 近 い	出 席 番 号 の 関 係 で	△ 入 学 当 時 親 切 に さ れ た の で	外 部 か ら は い っ た の で	N ₁	以 前 か ら の 知 り 合 い (小・中)	学 習 の 助 け 合 い	な ん と な く	先 輩	自 分 と 対 称 的 性 格 か ら	N ₁	わ か ら な い	無 記 不 明					
		男	96 ⁵ _{1.0}	2 ² _{0.2}	1 ¹ _{0.2}	3 ³ _{0.6}	8 ⁴ _{1.0}	1 ¹ _{0.2}	2 ² _{0.1}	0	0	0	1.0	55	52.8	27.3	5.1	2.6	0	1.8	0	71	80.3	2.8	1 ¹ _{6.9}	0	0	13	N ₁ ₉	N ₁ ₃			
女	52 ⁴ _{0.4}	2 ² _{0.3}	9 ⁸ _{1.9}	1 ¹ _{0.2}	1.9	0	1.9	1.9	1.9	0	61	49.2	9.8	4.9	24.7	1.6	3.2	6.6	98	75.5	1.0	1 ¹ _{9.4}	3 ³ _{1.1}	1 ¹ _{0.0}	7	N ₁ ₄	N ₁ ₃						
分類 別		32.7										25.6										37.3										4.4	

① この分類は H.H.Jennings や京大石井完一郎氏「少年輔導」の分類による、又club., Home-room をソシオメトリー実施の限界と制約から村田宏雄他の社会調査の技術は Psyche-group としている。

表14は友人の情緒的結びつきの程度を話しの内容から判断することで言葉の上で「親しい友人」と云う規定とどのような関連をもつかについて調べたものである。

男子では「学習について」、「趣味について」の%が高く、女子では「学習について」「家庭のこと」、「何でも話そう」など低学年では違った内容で内面的接触が行われていると断判できるだろう。

表15は親しくなった理由がどのようなものであるか、既述の環境的条件や group の位地を知るためのものである。調査の時期や、学年の構成の関係から以前からの知りあいと云うのが男女とも多い、それについて「club が同じ」「地理、交通関係」「気が合う」など Psyche, Socio, group などの影響の大きいことがうかがえる。表15と関連してとくに入試に関連して外部入学者の女子で、外部入学者だけで友人関係が維持されていることは club, Home-room いずれの取扱いにしても現在の学校教育のあり方、及び学習に対する利害が友人関係の相当強度の因子になっているとすれば、これらを全体的融和の前提とすることが困難なのかもしれない、とくに観察法によれば、高学年に進むにしたがい、この group のあり方が学年の動きに多くの影響を与えること、又その種の結合した集団の凝集性が高まることが観察される。これらが group-work としての望ましい態度育成にむけられるよう指導が生かされるべきであるが、他の集団への影響の仕方注目する必要があるだろう。

表18, 19はclass及びclubがどれほど集団の帰属性をもつかについて%であらわしたものである。いずれも「同異クラス」、「同異クラブ」が相当高い、これについては今後活動の継続を含めて変化をみる必要があろう。以上のような集団の特性を前提にし、第1次と第2次の調査において物理的時間の経過の他に、「教育実習」「夏期休暇中の旅行」「スクールキャンプ」「水泳大会」「学園祭」「ファンシーパレード」、「体育大会」「生徒会役員選挙」「クラブ夏期練習」、「クラブ合宿」「各休み時間」その他学校教育の中で意図的にプログラムがつくりあげられている、これらの経験を通すことにより、それらがどのような変化をするかについて、ソシオメトリーを用いて測定したものである。

表16 外部入学者の親しくなった理由

性別	内容 N ₁ %	クラブ活動で	出身学校の関係	趣味が同じ	なんとなく	クラスが一緒	地理的条件	入学式のとき	講座が同じ	外部からきてい
男	35 100.0	17.1	25.7	5.7	8.6	20.0	8.6	2.9	11.4	
女	58 100.0	20.7	19.0	6.9	8.6	8.6	20.7	5.2	5.2	5.2

表17 外部からの入学者の学友関係の現状について

性別	内容 N ₁ %	外部だけ	内外とも	内だけ	なし
男	13 100.0	15.4	69.2	7.7	7.7
女	19 100.0	31.5	63.2	5.3	0

表18 クラスと友人関係

性別	内容 N ₁ %	同クラス	同・異クラス	異クラスだけ
男	68 100.0	27.9	63.3	8.8
女	71 100.0	14.0	76.1	9.9

表19 クラブと友人関係

性別	内容 N ₁ %	同クラブ	同・異クラブ	異クラブだけ	なし
男	68 100.0	11.8	69.1	16.2	2.9
女	71 100.0	12.7	64.8	22.5	0

表20と21は集団における特性の変化を比較したものである。Home-room では第1次よりも第2次が凝集性、をはじめとしてあらゆる集団的機能が上昇していることがうかがえる。又 Home-room 間の特性があらわれている。これらが何に起因するのか、とくに教師と生徒の interaction に

よるのか、しかもそれが民主的に、専制的に、放任的におこなわれたかなど高校期の Home-room 運営に多くの参考資料を提供してくれるであろう。

club においても男子のテニス、バレーボール、新聞、女子のテニス、ワグネル、演劇など、凝集性の変化をしめしている。この資料に牽引し (attraction) に反撥 (repulsion) の両面のとらえかたに欠けているが、多くの club についていえることは、Sociogram の結果から、これらはほとんど「pairs や「traingles」であり「Stars」ではない。そ

れはいいかえれば、Leadershipのとられない状態が存在していることがうかがえる、とくに同年令であり、目的集団までの進展がむずかしいなどの条件が Leader の生じる要素を欠かせる方向へむけていると考えられる。group 自体民主的運営、自由放任的運営がそのような状態を生じせしめているのが、真の民主的運営への過度期現象なのか、共通目標が作られないほど、個性発現が充分でないのか、leader が育ちえないということは一つの研究課題である。しかし leader-ship が program や集団の凝集性と関係があるとする考え方には集団を有効なかたちで学校教育の中で活用していこうとする場合 leadership (民主的な) をもったものの育成に努力する必要がある。又人間形成の努力がはられないと R.M Stogdill, のいう能力 (知性、機敏さ、発言能力、独創性、判断力) (2)業績 (学識、知識、体力) (3)責任感 (頼もしさ、主導性、忍耐力、攻撃性、自信、他に優越しようとする欲求、(4)参加態度 (活動力、社交的能力、共働性、適応性、ユーモアの感覚) (5)地位 (ソシオメトリックな地位、人気、) などや C.A.gibb, の研究による(1)精力的、(2)自信の強さ、(3)知性、(4)雄弁、(5)首尾一貫した態度、(6)人間性への洞察力など育てることは困難であろう。勿論全体から遊離された leader の養成ということについて根本的な吟味も必要であるだろうが…。友人関係が高校期になると内面的接触が必要になる、その内面的接触の場としてこれら Psyche-group としての club, Socio-gronp としての Home-room いずれもその集団の構造やふんいき、および実際上の運営はその member の iuteration に大きな影響をおよぼすと考えなければならない。37年12月の新しい調査によれば視点をここになげかけてくれるようである。

表20 ホーム・ルーム、クラブ集団の特性

分類 集団名 性別			第1次 (36年6月)						第2次 (36年10月)					
			調査日											
			N 人 数	R 一 対 数	C 選 択 総 数	E 平 選 択 均 数	I 相 指 互 作 用 数	C. 凝 指 集 性 の 数	N 人 数	R 一 対 数	C 選 択 総 数	E 平 選 択 均 数	I 相 指 互 作 用 数	C. 凝 指 集 性 の 数
学 級 集 団	A	男	24	14	105	4.4	19.0	0.05	49	35	212	4.3	9.01	0.03)
	B		23	17	115	5.0	22.7	0.07						
	C		23	15	95	4.1	18.8	0.06						
	A	女	25	14	78	3.1	13.0	0.05	48	42	247	5.1	10.9	0.04)
	B		25	18	97	3.9	16.2	0.06						
	C		25	9	87	3.5	14.5	0.03						
ク ラ ブ	水 泳	男	6	3	8	1.3	26.6	0.2	5	1	6	1.2	30.0	0.1
	柔 道		5	0	2	0.4	10.0	0	5	0	4	0.8	20.0	0
	陸 上		5	4	8	1.6	40.0	0.4	6	3	9	1.5	30.0	0.2
	卓 球		7	3	7	1.0	16.7	0.1	6	2	6	1.0	20.0	0.1
	テニス		8	2	11	1.4	17.8	0.1	8	4	14	1.8	25.0	0.1
	バスケット		3	0	1	0.3	16.6	0	1	0	0	0	0	0

- ⑦ 豊沢 登 新しい生活指導の技術, 1954, pp126~142
- ④ 日本グループ・ダイナミックス学会編, グループダイナミックスの研究, 第2集1955pp19~26
- ② 青井和夫, 小集団の構造と機能, 1962pp24~25
- ⑦ 青井 和夫 小集団の構造と機能, 1962pp65~66
- ④ 大橋 幸 リーダーシップ, 1962pp301~304
- 大橋 幸, リーダーシップ, 1962pp308~316
- ④ ヘッドシップと同一視すると危険を伴う。大橋幸, リーダーシップ1962pp303~304

集 団	野 球		8	13	37	4.6	66.1	0.5	8	14	38	4.8	67.9	0.5
	ワンゲル		2	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0
	バレーボール		7	2	6	0.9	14.3	0.09	8	5	13	1.6	23.2	0.2
	テニス	女	14	12	35	2.5	19.2	0.1	13	16	34	2.6	21.8	0.2
	卓 球		6	1	6	1.0	20.0	0.1	5	1	4	0.8	20.0	0.1
	バスケット		6	3	9	1.5	30.0	0.2	6	2	8	1.3	26.7	0.1
	バドミントン		8	3	11	1.4	19.6	0.1	7	1	4	0.6	9.5	0.1
	ワンゲル		4	1	3	0.8	25.0	0.2	4	2	4	1.0	33.3	0.3
	新 聞	男	3	0	2	0.7	33.4	0	4	1	6	1.5	50.0	0.2
	演 劇		2	0	0	0	0	0	5	1	4	0.8	20.0	0.1
	英 語		3	0	1	0.3	16.7	0.13	2	0	0	0	0	0
	音 楽		8	4	9	1	25.0	0.2	5	2	5	1.0	25.0	0.2
	演 劇	女	4	2	5	1.3	41.6	0.3	4	3	8	2	66.7	0.5
	英 語		6	2	5	0.8	16.7	0.1	6	2	6	1.0	20.0	0.1
	花 道		8	4	9	1.1	16.1	0.1	8	4	9	1.1	16.1	0.1
	音 楽		3	0	0	0	0	0	6	0	1	0.2	3.3	0
	化 学		6	3	9	1.5	30.0	0.2	6	3	9	1.5	30.0	0.2

表21 ホーム・ルーム、クラブ集団の特性

分類	集団名	調査日 内 容 性 別	第3次調査 (37年12月)						クラブ参加程度			
			N 人 数	R 一 対 数	C 選 択 総 数	E 平 均 数	I 相 指 互 作 用 数	C. 凝 集 性 の 数	常 時 参 加 す	と 加 あ し な い 参 加 し	全 然 参 加 し	な い
学 級 集 団	A 組	男	23	18	50(103)	2.2	9.88 (20.4)	0.071				
	B 組		23	21	45(82)	2.0	8.89 (16.2)	0.083				
	C 組		23	17	48(111)	2.1	9.48 (21.9)	0.067				
	A 組	女	25	10	35(115)	1.4	5.83 (19.2)	0.033				
	B 組		25	20	46(116)	1.8	7.66 (19.3)	0.06				
	C 組		25	24	62(129)	2.1	9.48 (21.5)	0.067				
ク ラ ブ 集 団	水 泳	男	4	2	4	1	33.3	0.33	2	1	1	
	柔 道		4	3	9	2.2	75.0	0.5	3	1		
	陸 上		5	4	10	2.0	50.0	0.4	3	2		
	テニス		3	0	1	0.3	16.7	0			1	1
	野 球		10	10	27	2.7	30.0	0.2	7	2		
	ワンゲル		3	0	1	0.3	16.6	0		1	1	

※N=成員数

C=選択総数 choice made

R=相互選択の数

$E = \frac{C}{N}$ (集団の拡張性の指数
index of group espansimeness)

$I = \frac{C \times 100}{N(N-1)}$ (相互作用指数
interaction index)

$C. = \frac{2R}{N(N-1)}$ (集団の凝集性の
指数, index of group
cohesion)

以上は C.H.Proctos.

C.Ploomis

G.A Lundberg

M.Steele の指標を併用し
た。

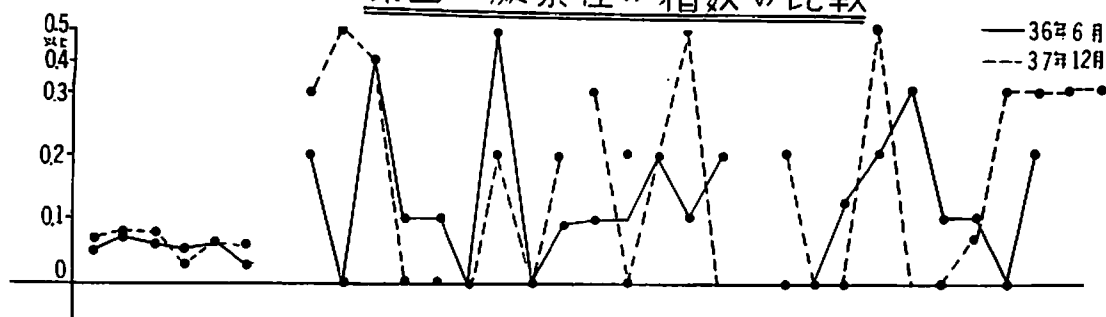
第1次でクラブ無所属者が8人であ
ったのが第3次では31人になってい

バレー		6	3	9	1.5	30.0	0.2	4	2		
テニス	女	10	13	28	2.8	31.1	0.28		5	4	
バスケット		6	3	9	1.5	30.0	0.2	4	2		
バドミントン		2	1	2	1	100	1	1			1
ワンゲル		4	1	3	0.75	25.0	0.2	2	1	1	
新聞	男	4	1	5	1.25	41.6	0.2	3	1		
英語		2	0	11	0.5	50.0	0	1	1		
音楽		4	4	10	2.5	83.3	0.67	4			
日本文学		3	1	2	0.7	33.3	0.33	1			1
花道	女	6	1	3	0.5	10.0	0.07	5	1		
音楽		7	6	12	1.7	28.5	0.28	5	2		
化学		3	1	3	1	50.0	0.33	2	1		
古美術		11	17	38	3.45	34.5	0.31	5	6		
日本文学		2	0	0	0	0	0		2		
美術		4	1	4	1	33.3	0.17		1	2	

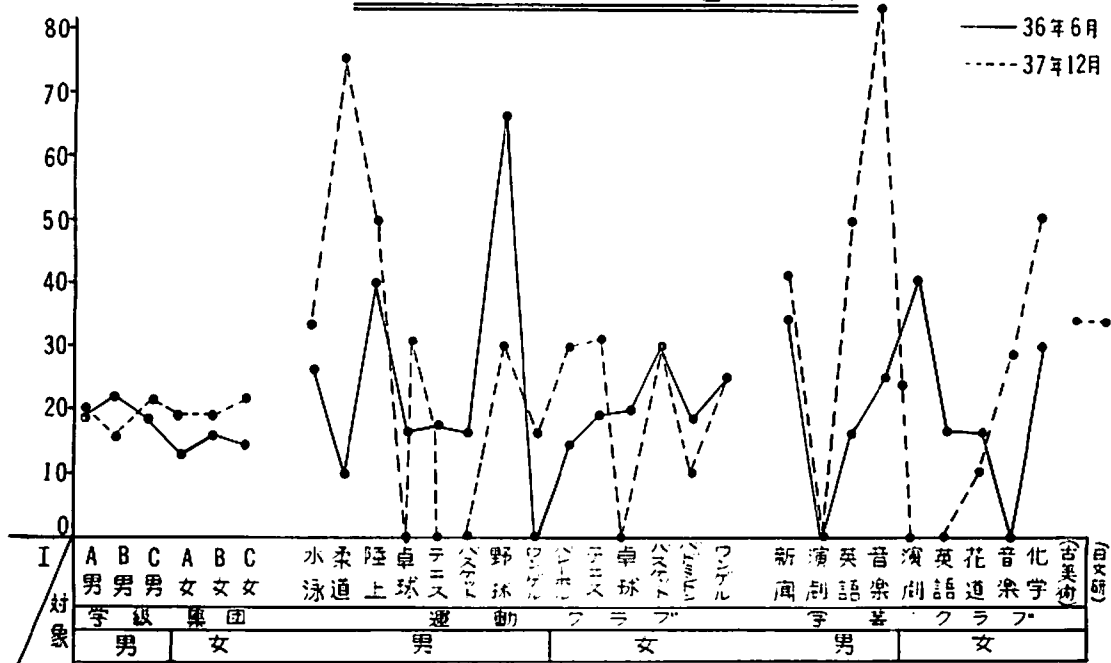
る。
 学級集団の N の合計からクラブ集団
 の N の合計を差引いて 31 以上になる
 がそれはクラブに学年として 1 人所
 属する者がそれに該当する。

グラフ 7

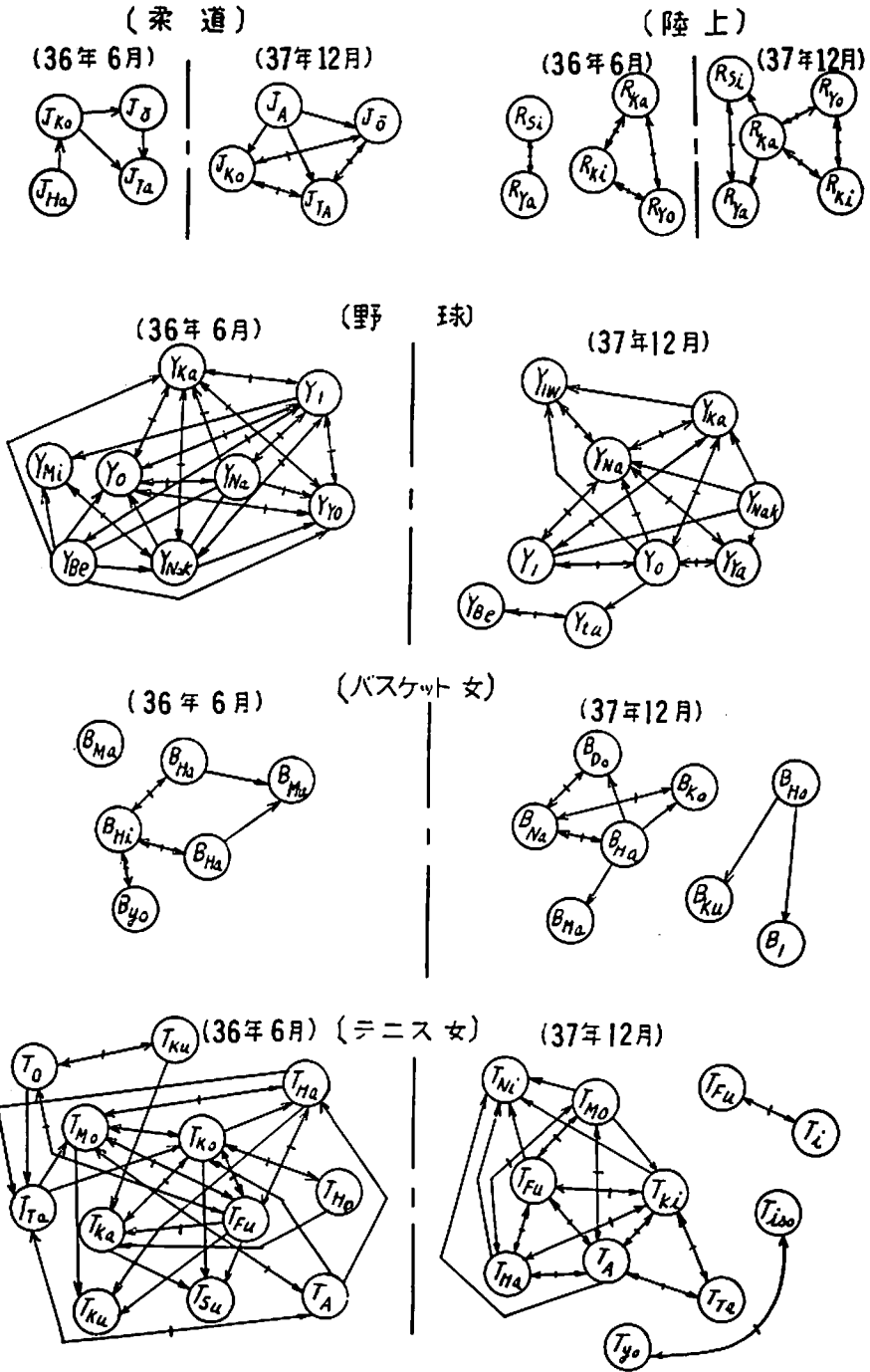
集団の凝集性の指数の比較



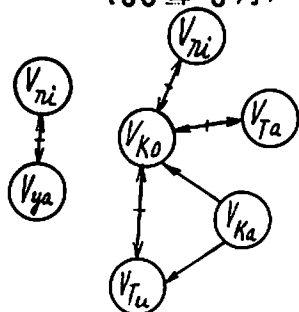
集団の相互作用指数比較



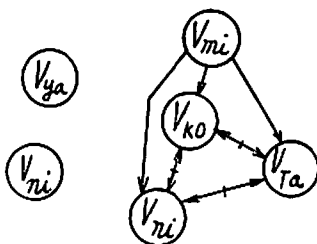
グラフ 6



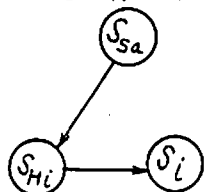
(36年 6月) (バレエ男)



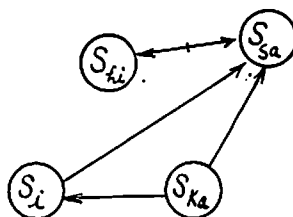
(37年 12月)



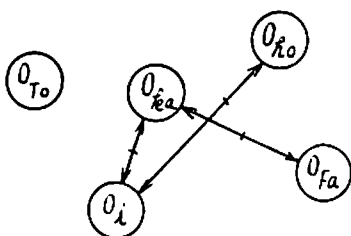
(36年 6月) (新聞男)



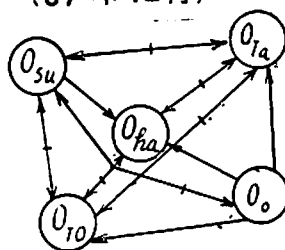
(37年 12月)



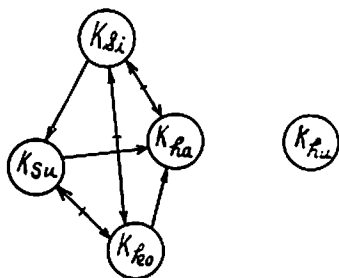
(36年 6月) (音楽男)



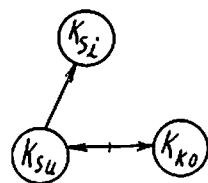
(37年 12月)



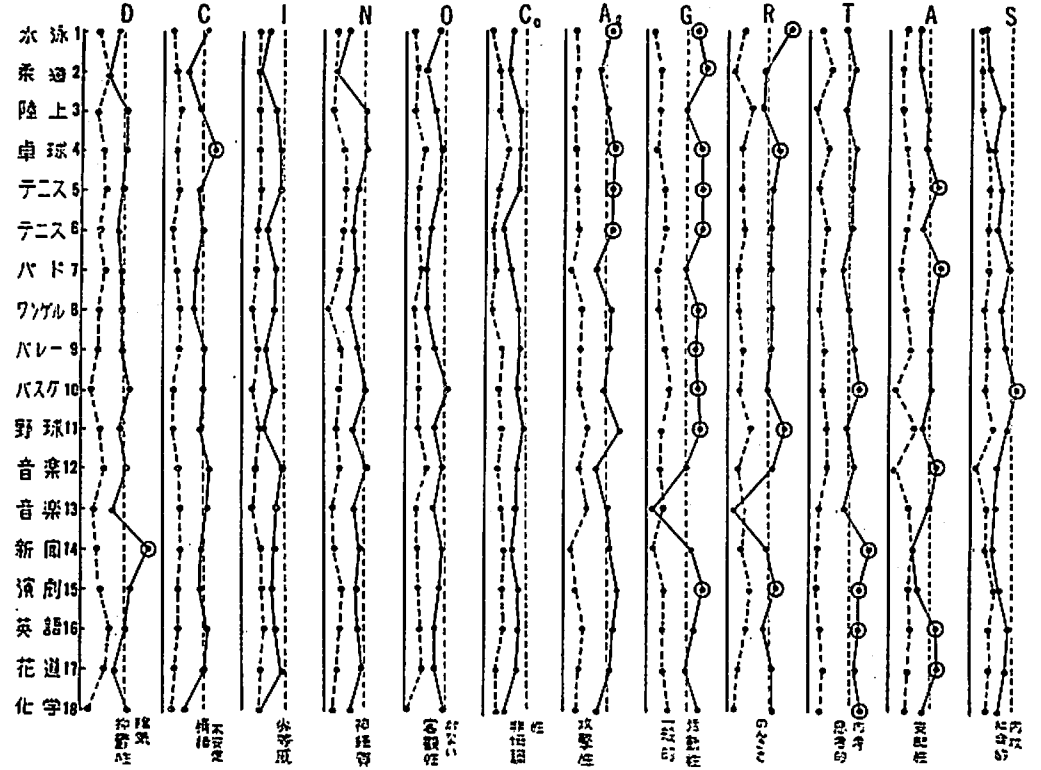
(36年 6月) (化学女)

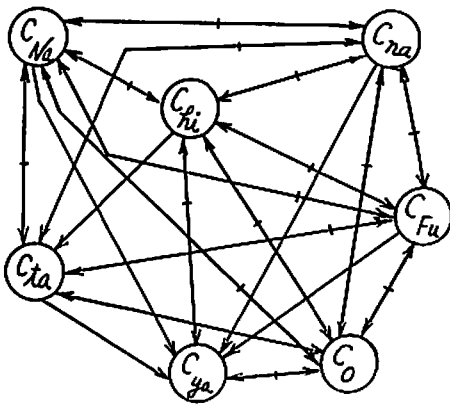


(37年 12月)



グラフ9 [YG検査によるクラブの特性] ——検査値(平均)標準偏差値





高2の2学期を終ると本校でもクラブ活動の直接参加から遠のいていくようである。

高2のはじめてさえ、何らのクラブにも関係しなかったものが高1の約4倍ある。

第20,21,グラフ, 6,7,8,について若干考察してみたい。学級集団については、相互作用指数、凝集性ともに変化はあまりみられないが、クラブ集団では運動、学芸ともに多くの変化を生じせしめている。これら集団の特性はこれら集団の人間関係(友人関係)促進の機能を多くもっていることがうかがえる。とくに表21の活動との関係でこれらを見ると常時活動をしているものほど interaction index も index of group cohesion も高い。しかし高3になると一日の生活時間の中でクラブ活動にさける時間がなくなるといことは人間形成の面からは大きな損失であるといわなければならない。学校教育で自己疎外的利用をさせても広義の自己疎外的条件

は充ちあふれているようである。

グラフ6,7,8,はとくに高い(interaction index や index of group cohesion) をしめしているものが、Sociogramの上でどのような変化をしめし、又高率と gram の type との関連たをみものである。人数の多いところで高い値が継続しているところは net type (網状) が多いことがわかる。これらは既述の leadership の養成と関連させ、今後の club 活動の指導の具体的内容として指導場面に生かすべきである。

表22 Y G 検査によるクラブの特性

項目			N	D	C	I	N	O	C。	Ag	G	R	T	A	S
運動クラブ	水泳	男 R	5	8.4	11.0	6.4	6.4	9.0	6.6	11.6	12.0	15.4	9.4	7.4	3.8
		SD		4.1	2.1	4.4	3.6	2.6	1.0	2.7	1.8	3.4	3.0	4.7	2.3
	柔道	男 R	5	6.4	6.4	4.6	3.8	5.2	5.4	8.0	15.0	9.8	11.4	7.8	4.6
		SD		6.0	3.8	4.0	3.2	3.3	3.2	3.0	3.5	1.9	5.6	3.2	2.7
	陸上	男 R	5	10.6	9.2	8.2	10.2	7.8	8.2	10.0	9.8	8.6	9.2	9.4	7.6
		SD		3.7	4.5	4.3	2.5	2.5	3.4	2.0	3.1	5.4	1.6	3.4	2.8
	卓球	男女 R	10	10.4	13.1	9.1	10.6	9.2	8.9	12.3	13.6	12.7	11.6	9.0	5.7
		SD		5.2	3.8	4.6	5.2	5.0	5.1	2.5	2.5	3.4	5.0	4.8	4.5
	テニス	男 R	8	9.4	9.1	9.6	8.8	8.6	8.1	11.6	13.6	10.9	10.5	11.6	7.5
		SD		5.7	4.1	4.9	5.8	3.4	3.6	2.8	4.3	3.4	2.6	5.9	4.9
	テニス	女 R	11	8.4	10.2	6.1	7.2	6.8	4.5	11.7	13.8	10.5	10.5	8.1	6.4
		SD		4.6	2.4	3.8	5.0	3.3	2.0	3.7	4.2	4.1	4.6	4.9	4.2
	バドミントン	女 R	7	9.1	8.3	8.7	8.0	5.9	6.3	7.3	9.9	10.1	8.3	12.7	9.7
		SD		5.9	3.2	3.2	4.5	4.9	2.4	1.6	2.8	2.2	3.8	3.0	4.9
	ワンゲル	男女 R	5	9.6	8.0	8.0	6.8	5.6	8.2	11.0	12.2	10.6	10.0	10.6	7.2
		SD		4.8	4.6	2.1	1.9	2.1	1.6	4.1	2.6	2.9	2.3	4.3	3.3
	バレーボール	男 R	8	9.1	10.6	5.9	8.4	7.4	8.4	10.9	11.5	10.5	11.0	10.0	8.6
		SD		4.0	4.2	3.7	4.7	3.4	4.9	3.2	4.2	3.3	3.8	5.3	4.2

	バスケットボール	女男	R	5	11.2	10.4	7.8	10.6	10.4	7.8	9.6	12.4	9.4	12.6	10.4	11.0
			SD		2.4	2.4	2.7	4.7	3.4	3.4	3.1	5.2	2.9	3.6	1.5	3.2
	野 球	男	R	8	9.1	9.6	5.1	7.3	7.9	9.6	13.4	13.6	13.9	9.1	8.1	8.4
			SD		4.9	2.5	4.8	3.6	3.9	4.0	5.4	3.6	5.9	4.6	6.0	5.6
学 芸 ク ラ ブ	音 楽	男	R	5	10.4	11.6	10.0	10.8	9.0	7.8	7.6	9.6	10.8	11.0	11.8	6.2
			S.D		5.6	4.0	3.3	4.4	5.3	3.4	3.4	3.0	2.6	4.8	1.7	1.5
	音 楽	女	R	6	7.8	11.0	8.7	7.3	7.2	7.2	10.2	1.1	1.2	8.7	9.8	5.8
			S.D		3.0	4.8	2.7	2.6	3.2	4.1	5.4	3.9	3.9	2.7	4.7	3.4
	新 聞	男	R	4	16.0	9.3	8.3	9.0	9.3	6.5	10.8	10.5	9.0	15.0	5.5	5.0
			S.D		3.5	4.6	4.5	3.0	3.1	4.9	1.9	1.7	3.5	2.2	5.5	3.3
	演 劇	男女	R	9	11.7	9.7	7.2	8.1	8.6	8.1	12.4	13.3	11.9	12.2	6.6	6.8
			S.D		4.2	4.0	5.0	5.0	3.7	4.2	2.4	4.0	5.2	1.9	4.6	5.8
	英 語	男女	R	9	10.1	11.2	8.3	8.6	7.9	8.2	11.1	11.8	8.8	12.3	11.2	9.0
			S.D		6.6	4.8	5.6	4.8	4.0	4.2	4.5	4.1	4.9	2.9	5.0	4.7
	花 道	女	R	8	8.8	10.1	10.0	9.5	7.4	7.8	10.6	9.6	10.6	11.0	11.5	8.1
			S.D		5.8	3.8	4.9	3.4	4.9	2.1	3.9	4.1	2.2	3.6	4.5	4.4
	化 学	男女	R	5	10.4	5.6	4.8	6.6	9.8	4.6	8.6	12.2	11.0	12.4	8.6	6.2
			S.D		1.4	2.4	4.0	2.7	0.7	2.0	3.3	5.2	1.8	2.6	3.9	3.9

表23 田中・ビネー式知能検査クラブ別

対象 クラブ	性 別	N	得点 平均	知 能 点			偏 差 値		
				最 高	T 最 低	R	最 高	T 最 低	R
陸 上	男	5	173	121	145	65	43	31	
卓 球	男	5	226	153	166	81	55	67	
卓 球	女	4	185	133	149	67	46	54	
バドミントン	女	7	162	103	132	56	36	47	
ワ ン ゲ ル	男	2	175	162	169	64	63	63	
ワ ン ゲ ル	女	3	189	119	164	67	42	59	
バスケット	男	1	161		161	59		59	
バスケット	女	4	150	130	137	58	44	52	
テ ニ ス	男	8	204	131	166	73	45	59	
テ ニ ス	女	11	206	135	167	75	46	59	
バ レ ー	男	8	189	129	168	70	46	60	
野 球	男	8	174	120	152	61	42	56	
水 泳	男	5	208	148	179	71	52	64	
柔 道	男	5	202	134	174	72	48	63	
英 語	男	3	178	127	150	67	43	56	
英 語	女	6	210	138	159	73	52	58	
花 道	女	8	196	103	146	67	36	51	
音 楽	女	6	183	118	147	65	42	56	
音 楽	男	5	212	149	178	73	51	61	

表22グラフ5は本校で実施したYGテストの結果をクラブ別に集計したものである。D（抑鬱性）について新聞クラブが高いので特筆される。C（情緒不安定）について卓球クラブが高い。I（劣等感）は学年の特性があまりでていない。Ag（攻撃性）について水泳、卓球、テニス、演劇などにかかなり高い得点がみられる。G（一般的活動性）は全般に高い得点をしめている。音楽は低い。

T（思考的内容）に新聞、卓球、バスケット、英語、化学が高い以上クラブの平均化された特性がだされたのであるが、これらがクラブによる特性が、そのような性格の類似したもの集まったのか、あるいはこれら平均化とその中における性格の特異性がどのように関連しあっているか、そしてそれらの interaction としての友人関係がどのように影響を受けてゆくか、興味ある問題である。友人関係が性格の類似したものの、相反する性格のもの、類似と関連して全体の平均に近づくとする Allport の説な

1) 本校研究調査課 当付中高生徒のYGテスト結果について、1961、付中高研究紀要の資料及び検査からまとめたものである。

化	学	男	1	183	183	63	63
化	学	女	5	180	143	156	66
新	聞	男	4	176	112	157	63
演	劇	男	5	205	162	179	75
演	劇	女	4	190	114	155	71

ど、この実態からは把握の材料を導き出すことは困難である。これらのグループが気質、性格まで触れ合う関係から外周辺へ向い、社会的態度、意見などに至るまでこれらの中に含まれる因子は学校教育の中で有

効な technique になりえるだろう。

表23は田中B式知能検査法によるクラブの特性をあげたものである。これは高2・3年（当校では高3は実質的にはクラブに参加しないが）における相関を今後の課題として解決をはかりたい。

表24 親しい友人の数は6月と
変りましたか性

性別	N ₁	内容 %	変いつて	変いつない	無明記
男	68	45	23	0	0
	100.0	66.2	33.8	0	0
女	71	41	29	1	1.4
	100.0	57.7	40.8	1.4	1.4

表25 変っている人はその人数
はどうですか

性別	N ₁	内容 %	多つて	少つて	無不記
男	45	34	11	0	0
	100.0	75.6	24.4	0	0
女	41	34	6	1	2.5
	100.0	82.9	14.6	2.5	2.5

表26 変っていない人は現状
についてどうですか

性別	N ₁	内容 %	満て	満てい
男	36	22	14	
	100.0	61.1	38.9	
女	21	15	6	
	100.0	71.4	28.6	

表27 友人の数の変わった理由

クラブ活動関係					
N ₁	内容 %	話合	多機	試発	活機
51	3	12	33	3	
100.0	5.9	23.5	64.7	5.9	

表28 友人の数の変わった理由

その他の関係で							
N ₁	座席がえ	通係	時がた	で自然	学園祭	キャン	休図録
45	10	2	13	12	4	4	
100.0	22.0	4.4	28.7	26.4	8.9	8.6	

表29 親しい友人との話しの内容は6
月からすると変わっていますか

性別	N ₁	内容 %	変いつて	変いつない	ほとんど	全然	無不記
男	68	4	21	41	2	0	
	100.0	5.9	30.9	60.3	2.9	0	
女	71	6	43	39	2	0	
	100.0	8.5	33.8	54.9	2.8	0	

表30 話しの内容はどんなふう
に変わりましたか

性別	N ₁	内容 %	お個	お互	その他
男	15	9	2	4	
	100.0	60.0	13.3	26.7	
女	23	17	4	2	
	100.0	73.9	17.4	8.7	

表31 あなたは6月からクラブを
変っていますか。

性別	N ₁	内容 %	変いつて	変いつない	その他	無不記
男	68	21	46	2	0	
	100.0	29.4	67.7	2.9	0	
女	68	16	53	0	2	
	100.0	22.5	74.6	0	2.8	

表32 現在クラブ活動にどれぐら
い参加していますか。

性別	N ₁	内容 %	ほと	とき	あ参	ぜん	し参	無不記
男	68	49	12	4	2	1		
	100.0	72.1	17.6	5.9	2.9	1.5		
女	71	38	18	5	8	2		
	100.0	53.5	25.4	7.0	11.3	2.8		

表33 現在のクラブに対する希望

N=22

内 容	るもの	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
	施設用具に関するもの	クラブ維持費に関するもの	疲労に関するもの	化に関するもの	クラブ練習の強化に関するもの	クラブ時間に関するもの	クラブ発表機会に関するもの	クラブ団結に関するもの	勉強とクラブの両立に関するもの	クラブの活性化に関するもの	クラブ内の人間関係に関するもの	もの	コーチに関するもの	一人一クラブ制に関するもの	クラブのあり方
%	33	2	1	2	4	2	8	6	13	17	9	3	12		
100	29.5	1.8	0.9	1.8	3.6	1.8	7.1	5.4	11.6	15.2	8.0	2.7	30.7		

表34 現在のホーム・ルームに対する希望

N ₁	何とも思わない	ホーム・ルーム単位の活動をやるべきだ	ホーム・ルームとしてのまとまりがない	伝達が多すぎる	おもしろい	まじめな話しを	ホーム・ルームにあまり期待しない	親しい者同士が	やりにくい	現在のままでよい	無 記
%	80	7	18	8	9	9	2	11	6	10	59
100.0	8.8	22.5	10.0	11.3	11.3	2.5	13.8	7.4	12.4		

表35 現在の友人関係がプラスになるか。

性 別	内 容 N ₁ %	な	なるようだ	な	わからない	無記不明
		る		い		
男	249 100.0	66.3	5.6	6.8	20.5	4.8
女	235 100.0	72.8	4.3	5.5	16.2	1.2

表36 現在の友人関係をこのまま続けてゆきたいか。

性 別	内 容	続けた	やめた	どうでも	疑問がある	わからない	自然にま	せる	無記不明
男	262	100.0	93.9	0	0.8	3.4	0.8	0	1.1
女	252	100.0	77.8	2.7	7.0	1.9	8.8	0.8	0.8

club,やHome-roomの凝集性や相互選択などに関連をもちながらもその集団の基本である dyard relationship は多くの変化を生じせしめる場合が多い。友人の数、話しの内容、クラブなどへの参加、各集団への希望はこれらの事項を裏がきしていると考えてよいであろう。

今後の問題点

悩みにおける学友関係では、とくに悩みの相談者という位地において、又理想を具体化する次元において重要なことがあきらかにされた。誰にも相談しないという群を学友関係の今後のあり方という観点と併合してみつめていくと青年期の人間関係のもっと高い価値的面があきらかにされるかもしれない。

学友関係が相互作用であるだけにそこには「気質的なことをふれあう関係」から「意見をのべあう関係」まで多くの巾をゆうしている、これら情緒面のとらえかたと集団としてのとらえかた、個人的問題点になるが、心理学や社会学の知識をたくわえることが急務のようである、又長期にわたる研究組織やそれらの中で具体化される項目を問題と解決のレールの上にのせること、又具体化から抽象化をはかること、など問題は山積している、学校教育の支えになる教育学の確立への期待とともに学校教育に対して科学的態度をもつことの必要性を痛感した。

クラブ集団が機能的には高度のものをもちながらそれが関与する時間的フクのなさをどうすればよいか、これらを進学、就職校などとの対比(階層)でとらえてみなければならない。研究といっても他人の業績を吸収することにより出発に位置したばかりである。自分なりに問題点を感じた面もあるし、それでこの研究に着手した意味はあったと信ずる。あせらず一歩一歩資料集めに精だし、いくらかでも問題解決に役立て、できるならば系統的体系を確立できる夢をもちたいものである。なおこの中の資料で第2回高等学校教育研究会(奈良女子大付高)、第3回高等学校教育研究会(東京教育大付属駒場高)で発表したものがある。

ここまでまとめるに際し、研究会の発表の前に東京教育大の竹之下教授に特別のご指導をたまわりました。調査実施に際して本校生活課の三鼓先生はじめ多くの先生方のご協力をえました。大阪府、市の教育研究所の先生方、大

阪、日新高校の岡田先生にはこの研究の出発に際しご尽力をいただきました。その他多くの方々のご協力で今一部をまとめました。感謝の気持は今後問題点の解決への接近によって確かめていただくつもりです。

参 考 文 献

オッタウエイ

- | | | | |
|-------------------------|----------------------|------|-----------|
| ① 福永 安祥訳 | 教 育 と 社 会 | 1953 | 関 書 院 |
| ② 阪本 一郎他 | 個 性 の 診 断 | 1661 | 牧 書 店 |
| ③ 田合 章他 | 現代教育学 第17巻(学校) | 1961 | 岩 波 書 店 |
| ④ 清水幾太郎 | 社 会 的 人 間 論 | 1954 | 角 川 書 店 |
| ⑤ 小川 利夫他 | 現代教育学 第16巻(青年の問題) | 1961 | 岩 波 書 店 |
| ⑥ 宮坂 哲文他 | 国民教育と生活指導 | 1960 | 明 治 図 書 |
| ⑦ 依田 新 | 青年心理学講座 | 1959 | 金 子 書 房 |
| ⑧ 菅又 淳他 | 保健体育学講座 | 1958 | 体育の科学社 |
| ⑨ ドベス
吉倉 節夫訳 | 青 年 期 | 1951 | 白 水 社 |
| ⑩ ウィラード, ウォラー
石山 修平訳 | ウイラー 学 校 集 団 | 1957 | 明 治 図 書 |
| ⑪ 中森 孜郎他 | 現代教育学 第18巻(教師) | 1961 | 岩 波 書 店 |
| ⑫ 石崎恒次郎 | 現代教育社会学 | 1956 | 理 想 社 |
| ⑬ 望月 衛 | 青 年 心 理 学 | 1951 | 光 文 社 |
| ⑭ 阪本 一郎他 | 人間関係の診断 | 1961 | 牧 書 店 |
| ⑮ 豊沢 登 | 新しい生活指導の技術 | 1954 | 紫 生 院 |
| ⑯ 廣野 健次
横山 一郎他 | 体 育 心 理 | 1962 | 錦 正 社 |
| ⑰ 波多野完治他 | 現代教育学 第2巻(教育学概論) | 1960 | 岩 波 書 店 |
| ⑱ 古旗 安好 | 教育心理学 第14巻 | 1956 | 世 界 文 化 社 |
| ⑲ 青井 和夫他 | 組織, 集団, リーダーシップ | 1962 | 培 風 館 |
| ⑳ 日本グループダイナミックス編 | グループダイナミックスの研究1,2,3. | 1955 | 理 想 社 |
| ㉑ 村田 宏雄他 | 社会調査の技術 | 1955 | 誠 信 書 房 |
| ㉒ 清水幾太郎他 | 現代教育学 第1巻(教育哲学) | 1960 | 岩 波 書 店 |
| ㉓ 上原 専禄 | 現代教育学 第4巻(教育思想) | 1961 | 岩 波 書 店 |
| ㉔ 日本教育社会学会編 | 教育社会学研究(17集) | 1962 | 東洋館出版社 |

参 考 資 料

- | | | |
|---|--|------|
| ① | 国立教育研究所 高等学校生徒指導調査 | 1955 |
| | 大阪教育研究所 // | 1958 |
| ② | 東京教育大学付属坂戸高校 高校生の悩みと意識調査 | 1959 |
| ③ | 東 大 付 属 高 校 高校生の悩みの調査 | 1960 |
| ④ | 東京教育大学付属高校 友人関係の促進と人権意識を
向上させるための読書指導について | 1959 |
| ⑤ | 広 島 大 学 付 属 高 校 生活意識に関する診断的研究 | 1959 |
| ⑥ | 東京教育大学付属高校 高校生の生徒指導のための実験的研究 | 1958 |
| ⑦ | 大 阪, 日 新 高 校 本校生の悩みの実態 | 1958 |
| ⑧ | 横山 一郎 体育的活動の実際場面における男女差の研究, 奈良女子
大付中, 高研究紀要抜刷 | 1960 |
| ⑨ | 横山 一郎 体育的活動を通して大人の提示する人間像における男
女差の一考察, 体育と小集団研究会誌 | 1961 |
| ⑩ | 広岡 亮蔵 9月22日 N.H.K.T.V.「親友について」 | |
| ⑪ | 石井完一郎 少 年 補 導 | 1960 |
| ⑫ | 樋口 忠清他 当付中, 高生徒のYGテストの結果, 奈良女子大付中,
高研究紀要発表原表資料 | 1961 |
| ⑬ | 横山 一郎 高校生における学友関係の実証的研究第2回高等学
校研究大会報告資料 | 1960 |
| ⑭ | 横山 一郎 高校生における学友関係の実証的研究第3回高等学校
研究大会報告資料 | 1961 |

なお、『日本古典文学大系本』の頭注(第二冊二八六ページ)にこの箇所の情景が、(2)巻十漢前帝后王昭君行三胡国二語第五の末尾近い部分の

彼王昭君ガ居タリケル所ニ行テ見給ケレバ、春ハ、柳、風ニ靡キ、鶯、^{ツレツレ}徒々ニ鳴キ、秋ハ、木ノ葉、庭ニ積リテ、^{サノ}隙無クテ物哀ナル事云ハム方無カリケレバ、弥ヨ恋ヒ悲ビ給ケリ。

とあるのに、情景の類似していることに注意あるべきを示してあるが、『俊賴髓』において

みかど恋しきに思し召し煩ひてかの王昭君があたりける所を御覧しければ、春は柳かぜに靡き、鶯つれつゝにて、秋はこのにはにつもりて軒のしのぶ隙なくといふものの哀なる事限りなし。

とあるに正に照応する。しかしながら『今昔物語集』において□の欠字部分は『俊賴髓』における「しのぶ」が当たるべきであるが、おそらく適当な漢字を見出さぬままに、欠字として後刻補うつもりであったのが、そのままになってしまったものであらう。

(七)

以上の考察は、(8)・(9)・(1)・(3)・(2)についてであり、これら以外の説話については、稿を別にして所見を申し述べる予定である。

『今昔物語集』の撰者が、その編述に当たって、その当時すでにひろく行われていた「口語り説話」を根気よく蒐集していったであろうということは当然予想されるのであるが、すべてがすべて、口語りによることはもちろん困難であり、すでにそれら口語り説話の記録、すなわち書承によったことも多かったにちがいない。『俊賴髓』は歌学書としての先駆的意義を持つものであると同時に、その中に豊富に盛り込まれた和歌説話こそは、俊賴その人の和漢の学殖ゆたかな記載もさることながら、彼の伝承した口語り説話そのものも俊賴によって大いに採り入れられたに相違ないであらう。かかる点からみても、『俊賴髓』が、俊賴の独自の筆のみになるとは考えられず、『今昔物語集』との関連深い説話も或いは口語りによらざるを得なかったかも知れない。このことについては俊賴その人についての考察をすすめた後にもっとはっきりと言ひ得ることであらう。

しかし、いまは『俊賴髓』が、それら口語り説話の記録メモであるにせよ、

『今昔物語集』が出来上る過程においては、とにかくその撰者が手許において一見に及び、その中に採るべき箇所があれば適当に取捨を施しつつ採録した資料の一つであったことを強く思うのである。

『今昔物語集』撰者の目と耳は、あくなきたくまじさを以て、多くの資料を消化したといえる。『俊賴髓』を参照しつつも、これだけにたよらず、広く和漢書にふれては、できるだけ典故に近づこうとした態度はたたえらるべきである。しかし、まったくの学者とは程遠い距離にあったその学識は、『俊賴髓』との比較だけにおいてもうかがうことはできよう。

小稿をつづるに際し、『日本古典文学大系本』(一一四)の恩恵にあずかること多大であったことを謝するものである。(昭37・11・23)

注

- (1) 岡田希雄氏「今昔物語の成立年時に関する疑問」(文学第一巻第七号昭8・10)
- (2) 酒井金次郎氏「今昔物語集の成立年時臆説——岡田希雄氏の説に關聯して——」(文学第一巻第九号昭8・12)
- (3) 片寄正義氏「今昔物語集の研究上」第一章・第二章
- (4) 平田俊春氏「今昔物語の成立に關する覚書」(古典研究第三卷第十三号昭13・11) 同氏「日本古典の成立の研究」八〇四ページ昭34・10
- (5) 川口久雄博士「大鏡の成立と時代」(国文学第二卷第十二号昭31・9)
- (6) 松本治久氏「大鏡の著作年代について——平田俊春氏の「源雅定」説の批判」(平安朝文学研究第一号昭31・12)
- (7) 橋健二「今昔物語集成立年時「保安元年以後説」についての一傍証」(国語国文第三十卷第五号昭36・5)
- (8) 酒井金次郎氏前掲論文一〇七ページ
- (9) 平田俊春氏前掲論文一〇七ページ
- (10) 松本治久氏前掲論文六七ページ
- (11) 倉野徳司博士「平安朝文学に於ける説話的要素」(文学第二卷第五号昭9・5)
- (12) 国東文磨氏「今昔物語集成立考」所収「今昔物語集と大鏡との關係」二二九ページ(昭37・5刊)
- (13) 目加田さくを氏「平仲物語論」第六章平仲説話の展開と平仲物語二三三ページ(昭33・5) 荻谷朴氏「平中物語」(平中物語)九二二ページ脚注(昭35・4)
- (14) 国東文磨氏前掲書「今昔物語集の撰述意図と撰者」一六九ページ

近時刊行をみた「日本古典文学大系本」の頭注(第二冊二八六ページ)にも「無名抄には見えない」とある。果してそうであろうか。従来、良本とは認められていない統々群書類従(第十五、歌文部)本の『俊賴口伝集』にさへ、

その楊貴妃がころされたる所へ御門おはしまして御らんじければ浅茅が原に風うち吹きてなになごりかはあらん(下略)

とあり、「日本歌学大系(第一巻)本」の『俊賴髓腦』には前掲のごとく見えてゐる。この『俊賴髓腦』に見える楊貴妃の記事は、「思ひかね別れし野をきてみれば浅茅が原に秋風ぞ吹く」とある源道済の歌の解釈、故実の説明に挙げられたものである。この道済の歌は、詞花集巻九雜上に「長恨歌の心をよめる」として載せられてあるが、俊賴は『俊賴髓腦』において、玄宗と楊貴妃との間の悲しくも亦美しい説話にもとづいて「思ひかねの」の歌について俊賴独自の解釈を示したものと謂うべきである。

この「思ひかねの」の歌の作者たる源道済は、周知のごとく『道済十体』を著わし、寛仁三年(1019)に没している著名な歌人である。俊賴がその歌について上掲のごとく「……とかのみかどの御心のうちをおしはかりてよめる歌なり。」と言った言葉は、彼独自の見解と認めねばならない。すなわち、「楊貴妃と云へるは、……みかど大きになしび給ひてつひになしびにたへずして幾程もなくうせ給ひにけりとぞ。」とある記事は、あるいは俊賴が記述するに際して用意された口承または書承の資料によつたかも知れないが、この歌の解釈における末尾の言葉こそは、彼自身の言葉と考えられねばならない。もし然らずしてこの部分も俊賴独自の表現ではないとするならば、『俊賴髓腦』の他の歌の解釈も俊賴のものではないと言わざるを得ない困難に出会うのである。

さらに、この箇所と『今昔物語集』の該当部分とを比較を試みる時、いかに両者が密接な関係にあるか、一目瞭然とも言ひ得る程である。

ここにおいて、この両書の末尾部分の関係を考へてみたい。以下(A)・(B)・(C)・(D)の四の場合を想定してゆくことにしよう。

(A) まず『今昔物語集』に記されているものを『俊賴髓腦』がほとんど同文的に採録したものとすればどうなるか。この場合には、俊賴は『今昔物語集』の文をそっくりそのまま頂戴した恰好で、ことさら源道済の歌の解釈をしたことになる。しかしながら著名な歌人たる道済の歌の解釈として「……あはれなりけむ云々」というような、『今昔物語集』の本文そのまゝのごとき言葉を以て、源俊賴たるものの面目を汚すほどに、表現することがあり得るであろうか。

俊賴の力を信ずるとき、このような想定は成り立ち得ないものとなる。

(B) それでは、『今昔物語集』と『俊賴髓腦』とが、共に同一の祖本ないしは説話から伝承されたのではなからうか、という想定を試みよう。だが、この場合(A)と全く同じ困難に立ち到らざるを得ない。『俊賴髓腦』における俊賴の独自性の否定ということになる。共通母胎の存在を認める可能性は、俊賴を信ずる限り全くないと言わねばならない。

(C) ついては、源道済が『今昔物語集』の本文に影響をうけて、すなわち、それに触発されて「思ひかね」の歌を詠んだのではなからうか、という想定も成り立つかも知れない。しかしこの事は、源道済の没年たる寛仁三年以前に『今昔物語集』の成立年時を溯らせねばならず、近時、白河院末、鳥羽帝の天永・永久・元永・保安・天治(1110—1123)の頃とするその成立年時の考察じといたく距り、現在のところ無理な想定ということになつてしまふ。

以上よりして、最後に、(D)『今昔物語集』が、『俊賴髓腦』より採録したのではないか、という想定に立ち到ることになる。

まず『今昔物語集』において、「彼ノ楊貴妃ノ被殺ケル所ニ、思ヒノ余リニ、天皇行給テ見給ケル時ニ」とある記述は、このような玄宗の悲嘆の行動を描写するとせば、本文中の、方士の出現する以前の箇所において記すのが妥当と言うべく、なにを好んで「天皇……失給ニケリ。」とある玄宗の終焉の後に記すことがあるだらうか。不自然の感をいだかせる。「然レバ、哀ナル事ノ様ニハ此レヲ云フナルベシ。」という附加的表現も、いかにも取つてつけた感じがする。

『俊賴髓腦』においては、全く首尾呼応した、最も自然な記述で、源道済の歌の解釈としてよく生きていると言わねばならない。

この両書の箇所は、共に源道済の歌の解釈の表現としてのみ導き出され認めらるべきものである。

かくて『今昔物語集』の作者は、この「卷第十唐玄宗后楊貴妃依皇龍被殺語第七」においては、『俊賴髓腦』の本文に明らかに依拠していると認められる。

なお、「日本古典文学大系本」の頭注(第二冊二八六ページ)に、「アサザ」について、

これをかながきにしたのは、その用語と相俟つて、かな文学との著しい交渉点と思われる。

と指摘されているのは、炯眼と謂うべきであるが、やはり『俊賴髓腦』の表記にしたがったものと見るべきであろう。

と、「牽星」とある字面は、「日本古典文学大系本」の頭注にもいぶかしいとされているが、『俊頼隨腦』にみえるように、「見も知らぬ所に行きてみれば」とあるのや、「ひこほし」とある方が妥当であろう。『今昔物語集』の「牽星」は両書に「牛をひかへて立てり」とあるから、『俊頼隨腦』のように「ひこほし」と記すか、或いは和名抄・名義抄にあるごとく、「牽牛」と書くべきであろう。「所ノ様 常ニモ不ニ似ザリツ」の部分もやはり『俊頼隨腦』にひきずられたものではなからうか。

(六)

次に(3) 卷十唐玄宗后楊貴妃依皇龍被殺語第七 について考えてみよう。今昔、霞且ノ唐ノ代ニ玄宗ト申ス帝王御ケリ。性、本ヨリ色ヲ好ミ女ヲ愛シ給フ心有ケリ。

而ルニ、龍シ思シケル后、女御有ケリ、后ヲバ
〔カシ〕 后宮ト云ヒ、女御ヲ
バ武淑妃ト云ケル。天皇、此ノ人々ヲ朝暮ニ愛シ 傳キ給ケル程ニ、其ノ二人ノ后・女御、相次キテ失ニケレバ、天皇、無限ク思ヒ歎キ給ケレドモ、甲斐無クテ、只、彼ノ人々ニ似タラム女人ヲ見バヤト、強ニ願ヒ求メ給ケルニ……楊玄瑛ガ一人ノ娘有リ、形テ端正ニシテ有様ノ微妙キ事、世ニ並ビ無シ、光ヲ放ツガ如キ也。……天皇、喜ムデ、「速ニ將參レ」ト仰セ給ヘバ、使、彼ノ女ヲ將參タルニ、天皇此レヲ見給フニ、初ノ后・女御ニハ増テ、美麗ナル事倍々セリ。

然レバ……三千人ノ中ニ只此ノ人ナム勝レタリケル、名ヲバ楊貴妃ト云フ。然レバ、他ノ事無ク、夜ル昼ル甞ビ給ケル程ニ、世ノ中ノ政モ不知給デ、只、春ハ花ヲ共ニ興ジ、夏ハ泉ニ並テ冷ミ、秋ハ月ヲ相見テ長メ、冬ハ雪ヲ二人見給ケリ。此様ニテ天皇卿ノ御暇モ無クテ、此ノ女御ノ御兄ニ楊国忠ト云ケル人ニナム、世ノ政ヲバ任せ給タリケル。

以下本文を掲げることは煩わしいので省略するが、安祿山の乱における楊貴妃の死、及び楊貴妃を忘れ兼ねた玄宗が方士を蓬萊に遣したこと、玄宗の悲嘆に堪えずにいづくもなく死んだことを記している。「日本古典文学大系本」の頭註にも示されているように白氏文集卷第十二感傷篇長恨歌や陳鴻の長恨歌伝のごときものを以て構成したものである。

しかしながら、ここに、その末尾の部分に見える次の箇所は、いかに考うべきであろうか。

彼ノ楊貴妃ノ被殺ケル所ニ、思ヒノ余リニ、天皇行給テ見給ケル時ニ、野ノアサチ、風ニ並奇テ哀也ケリ。彼ノ天皇ノ御心何許也ケム。然レバ、哀ナル事ノ様ニハ此レヲ云フナルベシ。

この箇所は、以上の楊貴妃説話の中では、むしろ中間部にはいるべきもので、とびはなれた感じがする。以下『俊頼隨腦』との比較考察をしなければならぬ。

『俊頼隨腦』は、

思ひかね別れし野をきてみれば浅茅が原に秋風ぞふく

是は楊貴妃が事をよめるなり。楊貴妃と云へるは、昔もろこしに玄宗と申すみかどおはしけり。固より色をなむこのみ給ひける。いみじう愛し給ひける女御后なむおはしける。后をば涼徳皇后といひ、女御をば武淑妃となむきこえける。いみじう愛おほしける程にとりつき二人ながらうせ給ひにけり。それおほしめし嘆きてこれらに似たる人やあると求め給ふ程に、楊元瑛といへる人のむすめ有りけり。かたち世にすぐれてめでたくなむおはしける。三千人の寵愛一人なむおはしけるをもてあそび給ひける程に、世中のまつり事をもし給はず。春は花をともにもてあそび、秋は月をともに御覧じ、夏はいづみを愛し、冬は雪をふたり見給ひき。これより御暇なく、この女御の御兄の楊国忠といへる人になむそのまつり事をばまかせてせさせ給ひける。

以下『今昔物語集』の本文に相似た構成を以て記している。方士の帰って、

かへりて此の由を奏しければ、みかど大きにかなしび給ひてつひにかなしびにたへずして幾程もなくうせ給ひにけりとぞ。

とあり、さらに続いて、

その楊貴妃が殺されける所へおはしまして御覧しければ、野べにあさち風に波よりてあはれなりけむと、かのみかどの御心のうちをおしはかりてよめる歌なりと結んでいる。

従来の研究においては、この箇所の吟味が無視されているようである。すなわち、『今昔物語集』に掲げられてある『俊頼無名抄』には、この箇所はなく、

に重点を置いたことと思われる。

(五)

(1) 卷十漢武帝以張騫令見天河水上二語第四

今ハ昔、漢ノ武帝ノ代ニ張騫ト云フ人有ケリ。

天皇、其ノ人ヲ召テ、「天河ノ水上尋テ參レ」ト仰セ給テ遣シケレバ、

張騫、宣旨ヲ奉ハリテ、浮木ニ乗テ河ノ水上ヲ尋ネ行ケレバ、遙ニ行キ行テ一

ノ所ニ至レリ。其ノ所、見モ不知ス。其二、常ニ見ル人ニハ不似ヌ様シタル者

ノ、機ヲ數立テ布ヲ織ル、亦、不知ヌ翁有テ牛ヲ牽ヘテ立テリ。

張騫、「此ハ何ナル所ゾ」ト問ケレバ、「此ハ天河ト云フ所也」ト答フ。張

騫、亦、「此ノ人々ハ何ナル人々ゾ」ト問ケレバ、「我等ハ、此レ、織女・

牽星トナム云フ。亦、其ハ何ナル人ゾ」ト問ケレバ、張騫、「我レヲバ張騫トナ

ム云フ。天皇ノ仰セニ依テ、『天河水上尋テ參レ』ト仰セヲ蒙テ來レル也」ト答

フレバ、此ノ人々、「此コソハ天河ノ水上ナレ。今ハ返リネ」ト云タルヲ聞テ、

張騫返ニケリ。

然テ、天皇ニ奏シテ云ク、「天河ノ水上ヲ尋テ罷テ侍リツ。一ノ所ニ至タレ

バ、織女ハ機ヲ立テ布ヲ織リ、牽星ハ牛ヲ牽テ、『此ナム天河ノ水上』ト申ツレ

バ、其ヨリ罷リ返タル也。所ノ様、常ニモ不似ザリツ」ト。

然テ、張騫未ダ返リ不參ザリケル時ニ、天文ノ者、七月七日ニ參テ、天皇ニ奏

シケル様、「今日、天河ノ辺ニ不知ヌ星出來タリ」ト。天皇、此レヲ聞給テ、

倭比思と給ケルニ、此ノ張騫ガ返リ來テ申ケル言ヲ聞給テゾ、「天文ノ者ノ『不

知ヌ星出來タリ』ト申シハ、張騫ガ行タリケルガ見エケル也ケリ。實ニ尋テ行

タリケルニコソ」ト信ジ思給ケル。

然レバ、天河ハ天ニ有レドモ、天ニ不昇ヌ人モ此ナム見エケル。此レヲ思フ

ニ、彼ノ張騫モ糸只若ニハ非ケルニヤトゾ、世ノ人疑ケルトナム語リ伝ヘタルト

ヤ。

『俊賴髓腦』

天の河うき木に乗れるわれなれやありしにもあらず世はなりにけり

是は昔采女なりける人をたぐひなくおぼしけり。例ならぬ事ありてさとにいであ
りける程に忘れさせ給ひにけり。心地よろしくなりていつしかと参りたりける
に、昔にも似ず見えければ、怨めしと思ひてまかりいでゝたてまつりける歌な

り。本文なり。漢武帝の時に張騫といへる人を召して、「天の河のみなみ尋ね

て參れ」とつかはしければ、うき木にのりて河のみなみ尋ね行ければ、見も

知らぬ所に行きてみれば、常に見る人にはあらぬ様したる者の機をあまた立て、

ぬのを織りけり。又しらぬおきなありて牛をひかへて立てり。是は天の河といふ

所なり。此人々は、たなばたひこほしといへる人々なり。「さては我はいかなる

人」と問ひければ、「みづからは張騫といへる人なり。宣旨ありて河のみなみ

尋ねてきたるなり」と答ふれば、「これこそ河のみなみよ」といひて、「今は

帰りね」といひければ、帰りけり。さて参りたりければ、「尋ねえたりや」と

はせ給ひければ、「尋ねたりつれば、たなばたひこほしなど牛をひかへ、なた

ばたは機を織りて、『これなむ河のみなもと』と申しつれば、それより帰り参り

たり」と奏しける。所のさまのありしにもあらずかはりたりければ、そのよしを

きゝてかくよめるなり。この歌をみかど御覽じてあはれとおぼしけむ、もとの

やうにかた時もたちさらず思召しけり。その後いくばくもへずしてうせ給ひにけ

り。塚のうちにをさめたてまつりける時に、この采女生ながらこもりにけり。そ

の御陵をばいけじめのみさゝぎとて、薬師寺の西に幾ばくものかであり。まこと

にや張騫帰り参らざるさきに、天文の者参りて、七月七日に「今日天の河のほと

りにしらぬ星いできたり」と奏しければ、あやしびおぼしけるに、この事をきこ

しめてこそ、「まことに尋ねいきたりけれ」と思召しけり。

この兩書を比較するに、本文的には極めて密接である。

ただこの説話において注目すべきことは、張騫が帰国して帝に奏上した言葉に

おいて、『今昔物語集』にみえる「所ノ様、常ニモ不似ザリツ」とあることは

『俊賴髓腦』には見えず、「所のさまのありしにもあらずかはりたりければ、そ

のよしをきゝてかくよめるなり」と、「天の河うき木に……」の歌の説明となつ

ている。『今昔物語集』のこの箇所は、この箇所としてよくあてはまっております。

張騫の言葉としてよく意味が通っているが、『俊賴髓腦』では、張騫のではな

く、歌の作者采女が、天皇の寵愛をうしなつてからの、わびしく思う宮廷の状態

の説明となっている。この箇所は、十分注目されねばならぬと思う。

或いは、『今昔物語集』の編者が、『俊賴髓腦』を見ているうちに、ついうっ

かりして「所のさまのありしにもあらず」とある箇所を「所ノ様、常ニモ不似ザ

リツ」と訳してしまつたのではなからうか。

なお、文中、『今昔物語集』に見える、「其ノ所、見モ不知ス」とある箇所

俊秘抄をこの二ヶ所（筆者注、「八月十五夜」及び「其ノ前ニハ冠山トゾ云ケル冠ノ巾子ニ似タリケルトゾ」の二句をさす）のみ参考にして他を棄てたかといふに、もと／＼今昔の基礎は大和の語にあるのだから、俊秘抄の筋の異なる点は参考できないし、参考にする立場からすればこの二ヶ所しか考へられない事を指摘する。次に、この解釈とは全く反対に、今昔が大和を採りながら勝手に記事を加へたのを、俊秘抄が（後出として）今昔の語を採つたので、一致する所ができたと解しては如何と見るに、さうすると、俊秘抄は今昔の大和に一致する大部には全く不忠実で故意に一致せぬ所だけ採つた事になる。かうした不自然な事は普通考へられないのである。従て、後の解釈は非論理的として退けられねばならない。この他にも、無理な解釈を企てえようが、今昔のこの条には大和物語の他に或る書を参考にしたと見られるのであるし、その部分が二つながら俊秘抄にあり、俊秘抄と今昔は直接交渉を認められたのであるから、今昔の参考にしたのは俊秘抄であると云ひえようと思ふ。

とし、平田俊春氏のも同調しておられる。しかるに最近、松本治久氏は、これらの所説に反対されて、

今昔物語が俊秘抄を材料としていたならば、「我が心」の歌を詠んだのは娘母として、この物語を構成したではないかと思われる。しかるに今昔物語では、娘母を捨てた男の歌としてるので、これは俊秘抄以外の材料を用いているのではないだろうか。

俊秘抄に収められている説話は、娘母捨山説話を含めて、それらはみなこの當時に於ては有名な、恐らく人口に膾炙していたであろうような歌とそれにまつわる伝説・説話が多く、今昔物語との間に必然的な関係をもたなければならぬ、というようものではなくて、人々の口へ語り伝えられて、それが今昔物語に、また俊秘抄に書き止められたとみるべきものではないだろうか。

と、『今昔物語集』と『俊類髓』との関係を否定しておられるが、果してそう認められるであらうか。

筆者は、酒井・平田氏説に同調するものであるが、松本氏説は説話の伝承の姿として口語り説話の盛行を十分考慮したもので、説話そのものが説話集から説話集への流動のみを事としたことではないことは、もちろんと言わねばならぬし、娘母棄山説話のごとき古来有名なものであり、それについての説話が多少の変化流動を伴いながら伝承されていったことは、当然ありうることである。しかし、松本氏はその所説においては、『大和物語』との比較が見えない。先学の試みら

れた論考にはすべて『大和物語』も考慮にいれられている。松本氏は『大和物語』は『今昔物語集』に関係せずとの観点に立つておられるのであらうか。

『大和物語』と『今昔物語集』との関係については松本氏の説と同じ立場に立つものとしては、すでに倉野憲司博士の考察がある。その所説において、

今昔の方が、大和や竹取のそれに比して余程自然であり、古風であり、又単純であつて、前者が後者の焼直しでないことだけは明瞭である。つまり一方が他方を臨写したのではなくして、夙くから描かれてあつた輪廓に、それ／＼異つた色彩を施したものと言ふべきである。

と論じておられ、娘母棄山説話については、

「其の前には冠山とぞ云ひける。冠の巾子に似たりける」といふ大和には全く見えない説明が、今昔の方にはついてゐる。

とし、さらに「よく注意して見ると、今昔は必ずしも大和に拠つたものでないことがわかる。」と、両者の関係を否定しておられる。近く、国東文磨氏も⑩、「現存の大和物語がはたして『今昔』の直接出典といえるかどうか、筆者は幾分疑問をもっている」と、その関係を疑問視されている。

娘を捨てたのは『大和物語』・『今昔物語集』では男であるのに、『俊類髓』では姪となつてゐる。「我が心慰めかねつ」の歌を詠んだのは前二者は男となり、後者は娘である。ここでは『大和・今昔』の方が自然であり『俊類髓』は、いかにも無理な感じがする。

しかしながら、『今昔物語集』卷三十の「金平定文・女出家語第二」について、目加田さくを氏が、『大和物語』の平仲説話の一たる「一〇三段」平仲が色好みけるさかりに云々」に依拠したものと思はれる」とされる⑪ごとく、『大和物語』は『今昔物語集』に対して出典として位置を保つと言わねばならないであらう。

この娘母棄山説話・平定文説話を含めて、『今昔物語集』卷三十に収められた十四話のうち、七話までが『大和物語』の説話と密接な関係にあり、それらすべてが『大和物語』に依拠していると断することはできないが、すくなくとも前掲の二話は『大和物語』を主軸にしなが、他書又は口承資料を参考としているものと認められよう。すなわち、卷三十「金平定文・女出家語第二」は『大和物語』に全く拠り、「信濃国娘母棄山語第九」は『大和物語』に主とし拠りながら、『俊類髓』よりも採録していると言えよう。他の五話については今触れるのを省くが、それぞれに『大和物語』を一瞥しつゝ、これ以外の関連説話よりの採録

大齋院の語ったことについて「よろこびけるとぞ」とある一件も見当たらない。
『今昔物語集』では、大齋院の木丸殿についてあわれがり、仰せられた事まで
で説話を切つてしまい、木の丸殿についての大齋院と惟規との事柄は、さして重
要でもないで、省略したものと思われる。

〔四〕

〔三〕 卷第三十信濃国姨母桑山語第九

今昔、信濃ノ国更科ト云フ所ニ住ム者有ケリ。年老タリケル姨母ヲ家ニ居エテ、
祖ノ如クシテ養テ、年来相副テ過シケルニ、其ノ心ニ此ノ姨母桑厭ハシク思エ
テ、此レガ姑ノ如ニテ老屈マリテ居タルヲ、極テ憫ク思ケレバ、常ニ夫ニ此ノ姨
母ノ心ノ「ク悪キ由ヲ云ヒ聞セケレバ、夫六借キ事カナト云テ、此ノ
姨母ノ為ニ心ニ非デ愚ナル事多ク成リ持行ケルニ、此ノ姨母桑痛ク老テ、腰ハ二
重ニテ居タリ。婦ハ弥ヨ此レヲ厭テ、今マデ此レガ不レ死ヌ事ヨト思テ夫ニ、此
ノ姨母ノ心ノ極テ憫キニ、深キ山ニ将行テ棄テヨト云ケレドモ、夫桑惜ガリテ
不レ棄ザリケルヲ、妻強ニ責云ケレバ、夫被レ責レ伦テ、棄ムト思フ心付テ、八
月十五夜ノ月ノ糸明カリケル夜、姨母ニ、去来給ヘ強共、寺ニ極テ貴キ事為ル見
セ奉ラムト云ケレバ、姨母桑吉事カナ詣デムト云ケレバ、男極負テ、高キ山ノ
麓ニ住ケレバ、其ノ山ニ遙々ト峰ニ登リ立テ、姨母下リ可レ得クモ非ヌ程ニ成
テ、打居エテ男逃テ返ヌ。姨母ヲ「ト叫ド、男答ヘモ不レ為デ逃テ家ニ返
ヌ。然テ家ニテ思ニ、妻ニ被レ責テ此ク山ニ棄テツレドモ、年来祖ノ如ク養ヒテ
相副テ有ツルニ、此レヲ棄ツルガ糸悲ク思エケルニ、此ノ山ノ上ヨリ月ノ糸明ク
差出タリケレバ、終夜不レ被レ寝ヌ恋シク悲ク思テ、独言ニ此クナム云ケル。

ワガコ、ロナグサメカネツサラシナヤバステヤマニテルツキヨミテ

ト云テ、亦其ノ山ノ峰ニ行テ、姨母ヲ迎ヘ将来タリケル。然テ本ノ如クゾ養ケ
ル。然レバ今ノ妻ノ云ハム事ニ付テ、由無キ心ヲ不レ可レ免ズ。今モ然ル事ハ有
ヌベシ。然テ其ノ山ヲバ其ヨリナム姨母桑山ト云ケル。難レ暖シト云フ語ニハ
旧事ニ此レヲ云フニゾ。其ノ前ニハ冠山ト云ケル。冠ノ巾子ニ似タリケルトゾ
語リ伝ヘタルトヤ。

（『新訂国史大系本による』）

『俊頼隨筆』

わが心なくさめかねつさらしなやをばすて山に照る月を見て

此歌は信濃の国にさらしな郡にをば捨山といへる山あるなり。むかし人の姪を
子にして年来やしなひけるが、母のをば年老いてむつかしかりければ、八月十五
夜の月くまなくあかりけるに、この母をばすかしのぼせて逃けて帰りにけり。
たゞ一人山のいたゞきにゐて夜もすがら月を見てながめける歌なり。さすがにお
ぼつかかりければ、みそかに立歸りてきければ此歌をそうちながめて泣き居
りける。其後この山をば捨山といふなり。そのさきはかぶり山とぞ申しける。
かぶりのこじのやうに似たるとかや。

この姨母桑山の説話は、これら二書より先に『大和物語』に載せられてある。

『大和物語』第五百十六段

信濃の国に更級といふところに、男すみけり。わかき時に親死にければ、を
ばなむ親のごとくに、若くよりあひそひてあるに、この妻の心いと心憂きことお
ほくて、この姑の老いかゞまりてゐたるをつねにくみつゝ、男にもこのをばの
み心さがなく悪しきことをいひきかせければ、昔のごとくにもあらず、疎なる
こと多く、このをばのためになりゆきけり。このをばといふ老いて、二重に
てゐたり。これをなをこの嫁のところせがりて、今まで死なぬこととおもひて、よ
からぬことをいひつゝ、「もていまして、深き山にすてたうびてよ」とのみせめ
ければ、せめられわびて、さしてむとおもひなりぬ。月のいと明き夜、「煙ど
も、いざたまへ。寺に尊き業する、見せたてまつらむ」といひければ、かぎりな
くよろこびて負はれにけり。高き山の麓に住みければ、その山にはるぼるといり
て、たかきやまの峯の、下り来べくもあらぬに置きて逃げてきぬ。「やや」とい
へど、いらへもせでにげて、家にきておもひをるに、いひ腹立てけるおりは、腹
立ちてかくしつれど、としごろおやの如養ひつゝあひ添ひにければ、いとかなし
くおほえけり。この山の上より、月もいとかりなく明くていでたるをながめ
て、夜一夜ねられず、かなしくおほえければかくよみたりける。
わが心なくさめかねつさらしなやをばすて山に照る月を見て
とよみて、又いきて迎へもて来にける、それより後なむ、姨捨山といひける。慰
めがたしとはこれがよしになむありける。

（『日本古典文学大系本』）

この三書の関係については、すでに酒井金次郎氏に次の如き論考がある。

これは今昔が大和を引用しながら俊頼抄を参考にした、と解する。では、なぜ

(9)	三〇	九	信濃国娘母葉山語
(10)	一三	語	夫死女人後不 _レ 嫁 _二 他夫 _一
(11)	一四	失語	人妻化成 _レ 弓後成 _レ 鳥飛
(12)	三二 二七	兄弟二人殖 _二 壹章 _一 紫菀語	
(13)	二八	藤原惟規於 _二 越中国 _一 死語	

。わが心なくさめかねつさらしなや
をばすて山に照る月を見て
。かぞいろはあはれとみらむつばめ
すらふたりは人にちぎらぬものを
。あさもよひきの河ゆすり行く水の
いつさやむさやいつさやむさや
。忘草わが下紐につけたれど鬼のし
こぐさことにしありけり
。忘草かきもしみに植ゑたれど鬼
のしこ草なほおひにけり
。都には恋しき人のあまたあればな
はこのたびはいかむと思ふ

まず、『今昔物語集』の説話構成においては、(1)・(2)・(3)・(4)・(5)・(6)・(7)・
(10)・(11)・(12)・(13)というように、(8)・(9)を除いては、その配列の順序が判然と隣り
あつてゐるし、『俊頼髄腦』の側からみても、(13)・(9)を除いては、(12)・(11)・(7)・
(1)・(6)・(10)・(8)・(2)・(3)・(4)・(5)・というように連続している。このことは、両
書がなにか深い関連があることを予想させる姿を示していると言えよう。『今昔
物語集』において単独に採りあげられている(8)と(9)の二説話をまずとりあげてみ
よう。

(三)

(8) 卷第二十四藤原惟規、読_二和歌_一被_レ免_二語_一第五十七

この説話は紫式部の兄、藤原惟規が大斎院の女房に通ひ、とがめられたが、大
斎院の言葉によつて出門を許され、和歌によつてこれに酬いた、というのであ
る。

今ハ昔、大斎院ト申スハ、邑上天皇ノ御子ニ御座ス。和歌ヨナム微妙ク読セ
給ケル。

其ノ斎院ニ御座ケル時、藤原ノ惟規ト云人、当職ノ蔵人ニテ有ケル時ニ、彼ノ
斎院ニ候ケル女房ニ忍テ物云ハムトテ、夜_ニ其ノ局ニ行タリケルニ、斎院ノ侍
共、惟規、局ニ入ヌト見テ、惟ガリテ、「何ナル人ゾ」ト問ヒ尋ケルニ、隠レ初
ニケレバ、否誰トモ不云デ有ケルヲ、御門共ヲ閉テケレバ、否不出デ有ケルニ、
其ノ語ヒケル女房、思ヒ佗テ、院ニ「此ル事ナム候ゾ」ト申ケレバ、御門ヲ開テ
出シケルニ、惟規出トテ、此ナム云ケル、

カミガキハキノマロドノニアラネドモ、ナノリヲセヌハ人トガメケリ
ト。後ニ、斎院、此レヲ自然ヲ聞食シテ哀ガラセ給ヒテ、木ノ丸殿ト云事ハ我レ
コソ聞シ事ナレトソ被仰ケル。彼ノ惟規ガ孫ニ盛房ト云者ノ伝ハ聞テ語リシ也。
彼ノ惟規ハ極ク和歌ノ上手ニテナム有ケルトナル語リ伝ヘタルトヤ。
この説話は、『俊頼髄腦』においては「朝倉や木のまる殿に我をればなのりを
しつゝゆくはたがこそ」の条において、次のごとく載せられてある。

大斎院と申しける斎院の御時に、蔵人延則女房に物申さむとて、忍びて夜参り
たりけるに、さぶらひどもみつけてあやしがりて、如何なる人ぞと問ひたづねけ
れば、かくれそめてえ誰ともいはざりければ、御門をさしてとめたりけるに、
かたらひける女房、院に「かゝる事なむ侍る」と申しければ、「あれは歌よむも
のとこそきけ、とくゆるしやれ」と仰せられければ、ゆるされてまかりいつとて
よめる歌、

かみがきはきのまる殿にあらねども名のりをせねば人とがめけり

とよめる、斎院きこしめしてあはれがらせ給ひて、「このきのまる殿といへる事
は我こそ聞きし事なれ」とて仰せられける事を、女房承りてこの延則に語りけれ
ば、この事よみながらくはしくもしらざりつる事なりとて、このことのわびしか
りつればこの事をよく承らむとて、ありける事なりけりとてよろこびけるとぞ、
守房語りし。その延則が先祖にてよくきゝ伝へたとぞ。

この藤原惟規の「かみがきは」の歌は、『金葉集』の巻第九雜上(五八三)に

選子内親王いつきにおはしましける時、女房にもの申さむとて忍びてまゐりた
りけるに、さぶらひども、いかなる人ぞなどあらくまうして、とはせ侍りけれ
ば、たゝうがみにかきておかせ侍りける

神垣は木の丸殿にあらねども名のりをせねば人咎めけり

藤原惟規

とあるが、『今昔物語集』の本文は、簡畧な『金葉集』に拠ているとは認めがた
い。「日本古典文学大系本」の頭注(四三五六ページ)に「本語は、或は俊秘抄巻
下に基き説話を構成したものではないかと思はれる。」とされているが、まさし
く、『俊頼髄腦』に依拠しているものと認められよう。両者の比較において、『今
昔物語集』には肝心の、大斎院の言葉である「あれは歌よむもの」とこそきけ、と
くゆるしやれ」が見当たらない。しかも木の丸殿については延則が不案内であり

『今昔物語集』と『俊賴髓腦』との関係

(一)

『今昔物語集』と『俊賴髓腦』との関係については、『^証今昔物語集』をはじめとして岡田希雄⁽¹⁾・酒井金次郎⁽²⁾・片寄正義⁽³⁾・平田俊春⁽⁴⁾の氏等によって考察されたが、近時それらに更に川口久雄博士⁽⁵⁾・松本治久氏⁽⁶⁾も立論されている。

『^証今昔物語集』において芳賀矢一博士は『俊賴髓腦』を『今昔物語集』の出典と見做さず、同一説話で他書に散見したものの所収文献として取り扱っており、岡田希雄氏は『今昔物語集』の方を先出とし、酒井金次郎・片寄正義・平田俊春氏は『俊賴髓腦』の方を先出とし、川口久雄博士は『大鏡』の成立についての所説に連関して『今昔物語集』の成立にふれ、平田説を批判され、松本治久氏は両書の共通母胎を想定された。

最近刊行をみた「古典文学大系本」『今昔物語集』(一一四)の頭注においては、『俊賴髓腦』所収説話は殆ど類話として取り扱われ、ただ一つ巻第二十四第五十七話「藤原惟規読和歌被免語」だけが「或は俊秘抄巻下に基き説話を構成したものではないかと思われる。」と説かれてある。

以上のごとく諸先学によって両書の比較が試みられてはいるが、その前後関係が判然とされていないのが現状である。『今昔物語集』の成立年時については現在のところ、片寄正義氏の保安元年以後成立説が有力で、筆者もその傍証たりうるかと思われるものについて小論を試みたのが、いまこにおいて両書の関係のみについて再吟味し、『今昔物語集』が明らかに『俊賴髓腦』に依拠しているを再確認すると共に、『今昔物語集』の作者が『俊賴髓腦』を素材とする場合、どのような表現手法を試みたかについて考察してみたい。

『今昔物語集』の本文は「日本古典文学大系本」及び「^{増訂}国史大系本」に、『俊賴髓腦』の本文は「日本歌学大系本」及び「続々群書類従本(俊賴口伝集)」に拠った。

橘 健 二

『今昔物語集』と『俊賴髓腦』との間に見られる共通説話は、次のごとき十三話が主なるものとして挙げられよう。

今昔物語集		俊賴髓腦	
卷語	説話表題	和歌表題	
(1) 一〇四	漢武帝以 ^三 張騫 ^二 令 ^レ 見 ^二 天河水 ^一 上 ^二 語 ^一	。天の河うき木に乗れるわれなれや ありしにもあらず世はなりにけり 。みるたびに鏡のかけのつらきかな かゝらざりせばかゝらましやは 。なげきこし道の露にもまさりけり なれにしさとをこふる涙は	
(2) 五	漢前帝后王昭君行 ^二 胡国 ^一 語	。思ひかね別れし野べをきてみれば 浅茅が原に秋風ぞふく	
(3) 七	唐玄宗后楊貴妃依 ^二 皇龍 ^一 被 ^レ 粉語	。人しれず思へばうけることの葉も つひにあふせのたのもしきかな	
(4) 八	寢且 ^二 與招考見 ^二 流詩 ^一 恋 ^二 其主 ^一 語	。垣ごしにうまを牛とはいはねども 人の心の程をみるかな	
(5) 九	臣下孔子道行値 ^二 童子 ^一 問申語	。血の涙おちてぞたぎつ白川は君が よまでの名にこそありけれ	
(6) 二九	震旦國王愚斬 ^二 玉造手 ^一 語	。秋風に初雁がねぞ聞ゆなるたが玉 梓をかけて来つらむ	
(7) 三〇	漢武帝蘇武遣 ^二 胡塞 ^一 語	。朝倉や木のまる殿に我をればなの りをしつゝゆくはたがこそ	
(8) 二四 五七	藤原惟規読 ^二 和歌 ^一 被 ^レ 免語	。かみがきはきのまる殿にあらねど も名のりをせねば人とがめけり	

研究紀要 第5集

昭和37年12月10日 印刷

昭和37年12月20日 発行

奈良市紀寺町

奈良女子大学文学部

附属中学校・高等学校

印刷 奈良明新社